湖月抄

玉かつら

玉鬘　細　巻の名歌を以て号とす　河　恋わたる身ハそれなれど
たまかづらいかなるすぢを尋ねきつらん　花　此巻ハ乙女巻よ
次第をいへバ六条院卅五歳の三月より十二月まての事を
いへるなり　源氏君の年数　諸抄説　異本一説云此巻の源氏
の年齢卅四歳の九月より十二月までのことなりし女中より
卅四歳の八月より六条院経営の沙汰ありし其次の九月よりは
しそ故に此巻よ三月よりの沙汰ありハ玉鬘の君にはしくし
かくのすゝめて源氏君乃年齢よハかぞふべきにあらずとぞ其
此巻よ太宰筑紫よて玉鬘の君よめぐりあひく源氏の君
ようき事ようく云ハ九月のすゑつかたとあらむを源氏の
月よハかぞふべきにや。御ぞし女の君よ秋好の中宮より此巻の
まへつかされし紅葉のくちこしあつ胡蝶の巻想と年源氏
卅五歳の春よあらそ侍るにや。同玉鬘の中宮源氏卅四歳

六条院うつりの年は九月とあるハ乙女の巻に明石の上入
ハ乙女の巻の末に神無月に六条院にうつりたまふよし見え
たり。されバ若菜の巻に源氏若夕霧の上のうへと宣ふ所に玉鬘乃
町まりの冬の人のゐるをハおとゞハ心ざしまうしとのまうち寄
源氏廿四歳の九月といへども明石の上六条院にうつりたまひて
若菜にしても明石の上は冬の町にうつりすませての給ひなるゆゑ 若菜
明石上は冬の町にはじめて乙女の巻にまじへて附ける
故に明石上のうつりたること定てられハ心のえてこのくだりなどあるを疑
ハ若葉のまでうつりねらんもなほ冬の町にうつりすませてのまへなるをも
あるべし 同巻に源氏廿四歳といへるハ若菜風巻の末に源氏四十ノ賀
の年数にあはざる故なり 若菜上巻の巻 はじめハ源氏廿
七歳よりは廿八歳の十一月までとあれども玉鬘男子
ぞうみ奉る十一月のすゑまで秋の夕乃さまでいとね

みな此翌年此翌一年をさだめずしてのこりのあらやすとすれば
此後より若菜が巻に若菜上巻ハ源氏廿六七八歳三年乃
事蹟つゞく後編の後より一年分おくれて是れの上源乃
四十の賀年数相叶ふべきなるべし 按者人の明らかにて為也

年月つもりぬれど　細此巻ハ源氏卅五の時の事也源氏の夕顔の事を忘れ給はで玉鬘の事をおもひ出給ふよりかきおこせり此段ハ夕顔の巻の事を思ひ出給ふ也末摘花の巻のはじめにも夕がほのつゆにおくれし心地をとあり今此巻のはじめも夕がほの事をおもひ出給ふよりかきおこせるハ作者の心也

年月つもりぬれど、あかざりし夕がほを露わすれ給はず、心々なる人のありさまどもを見給ひかさぬるにつけても、あらましかばと（夕顔の事）あはれにくちおしくのみおぼし出づ。右近は何の人かずならねど（細 夕顔の上の侍女右近へ取なし）、なほ其かたみと見給ひてらうたき物におぼしたれば、ふる人の数（年寄女房達の事也）につかうまつりなれたり。すまの御うつろひの程に（細 此右近ハ紫上の御方に候ふなり）、たいのうへの御かたにみな人々聞えわたし給ひし程より、そなたにさぶらふ（紫上の方なり）。心よきかいひそめたる物に、女君も（紫上）おぼしたれど、心のうちには、古君ものし給はましかば、あかしのほど

不溢 孝経 溢ハ物のあま
おやしきものに師人を
いやしめ次おもてより
しても、もちてぬくし
この御とのうつりのかずに
六条院のうつし花し葵
の後に成りてのこと孟一方
物よりのしく

あかしの御かたばかりのおぼえにはおとり給はざ
らましさしもふかく御心とゞめ給はざりける
人をだにおとしあぶさずとりしたゝめ給ふ
御心ながさなりければまいてやんごとなきつら
にこそあらざらめこの御とのうつりの
かずのうちにはまじらひ給ひなましと思ふに
あかずかなしくなん思ひけるかの西の京
にとまりし若君をだにゆくへもしらず
ひとへに物を思ひつゝみ又いまさらに
かひなき事によりて我名もらすなと口
がため給ひしをはゞかりきこえて尋ねても
音づれきこえざりしほどにその御め

のとのをとこ少弐になりて行ければくだ
りにけりかの若君の四になる年ぞつくし
へは行ける母君の御ゆくへをしらんと
よろづの神仏に申して夜ひるな
きこひてさるべき所々をたづねきこえ
けれどつひにえきゝいでずさらばいかゞは
せん若君をだにこそは御かたみに
見たてまつらめあやしき道にそへたて
まつりてはるかなるほどにおはせん事のかなしき
ことなをちゝ君にほのめかさんと忍
びけれどさるべきたよりもなし
さて母君の御ゆくへもしらず

かさらくもみられ給ハ ねより 細 父君とちと志 所ゐ つもの中まりしける所 から二条つりの時 仲麿の(?)みあひしまうし ゆさうさんハと 細 父君 のはうさにおかうくとよ とくめあさんもきれ もかとうしろめて給ヘ 知るみゆくら 細 らくしと 十ちくハ知給みつう ハ中 くト空のらうハゆるし あかありしきゝし おや くらよ 知 く云ろらい てまでのしまさらんるす と出ちくおそしはくしへ 五ゆうらともじ(?)なるゝ おうゝくよそくのはのきへ 舟中よそ 玄翠のさ魚のれ えらん面よ給うし同めてく 表侍云ひやるへし 細 女武女姉れ むまつれ 持云ア君ゆさうる名ハあそ えもしてわかれし

とひ給くぐらこうえんぞみつゝくもごゝろれ あらねよゆきをるき人をもくめてそらつ ちんもうろめくゝらへし。たるあり(次の中ねのこ) みそらぐねしゆめのめぐるみもあり ばるじそのうちへうくしひあへをさ のさ海し うけくしうういまりくちくこう なかうれさ海代しるすりしつくりひかる舟 (おぼ 雑わか舟ろくし) よのもく漕(こぎ)ありゆしいふしと衣をよかん 此しろゆきすさらよむそしきとわたと れぞあらくよそくのけりらへいつうらむ あまよつけて。あうこしあり時あすぐむとめ (ああれし) (舟中すて鳴車といふ) だとえひこうさしと。ふるみくう(ゆ)しとう

おりゐせめしうくし 細 廿日 并安首の詩の作らん何 海花島五かを依る四 也河海霊忌くをちハ おいせまりつくしもうも 夕出上の在世ふくきさ 此霊に生すよ隠ふるれバ まのらそうよハ西お具 とべきくとありぬむ とあの旬 云ろうくしを よゆきさきとのく教換 あるするさみへくハきえ うつすをさ猿八色ニ所ニ ゆやのあへまうりてをそ くうりくれてるり かう瀬知月もいれかう みそうゝて日をと君まう やもしハうがしとぞ云ふ さく舞八景のまのく新 あうりころ うちうまうつうさ 細 川云 よ西設 舜 舟人のこゝふ ことにご別よ子細す 所舟うとるうへし

はいきあかり。ゆりしみさ云(はをうつ波の上の月を) 別くせまとつ(あ) のよるをとをひ出かろし ろわつくおくをとしよのをいくかそうら ことをす 迷ゆもうれ。おわをありしゃバ神よ八 くずつさしう海しと。京のことをおもひやら (いとゞしくすぎこの方のれんより) あくよくる波もうしやましく ふね 舟子どものあくしてきつきあかく うらめしくもとそくさよけうれと うてふをとるくまくに。ふくうりさしむつひて あさこそり 妹云 舟人をを推(?)とうふとうゆかさ将の翁(こう)が お しげまこえのとこゆり かそき云 楫しうさもり楽をとろくぬ 晩さく(?)いふく

すゝうきむかひて　細　常によるべあり　師　小式部女二人之　師　死後の地ら世まうしかつらし云々

小式部か妻の但又大弐三位二人まか小式部内侍二人とこそ志られた　細　先尭孟子内侍之ミとく

母人は別と　河　大源兼房の女錦内侍近衛なり　細　我身こそ若しひとつのおもひ人は海

の思ひのわかれぬとして　逢　それは夕霧をこひてすゝかの母人は雅とうふなと云んとし

もあらしこも　細　君とは夕霧上のこと　我夕霧の御乗ありぬる女はまめてしまふせ人のうれ

何ものありとみやまうらまよ　しらくていふる我　河　此二首小式部女二人　師　錦内侍兵衛佐　弟

まま海うなりし　師　住吉河の浪よりおこり　え　小式部

八雲のうらねる

の君の別よとまうくて

便あの滝まちさいつなりせ

んといふる女は夷し田舎

別く又云或物語云南海

よ一の舟あり雛をまさく

て成長の時沖へつれて

わてともが川にうれと鯲

の別をとをさく候田舎の

別の後不聞なて

うての中をなことゝもさうそ

細こそれは志こなれとは形をと

さて志れざりく　玉七　十早振り

ねのならさとなれよも

云は忘れをとあらのまく泳

河　錦前あまし　師　夕霧の

あまれいづくよ君をまつらん。ひとつの別より　紫式部　これ

そのかみにこゝろをやらくいひけるかの　金澤侍

ときされをまてまくまれてもともさるかでも夜

しそのとしくさよなりて、うしとなりてより　孟子細親おく

つきそいは、まいくもりなるう経をぬりひやり　弟のつゞかうそ　あとくし

くこひあまそこみ君とをしつきやそわ　小式部内侍のしたひく

りしくもさ夢みのよいとしく海さくのまへ　母

え給ひなきまつりゆかぬしも海なちた女なりし。

さまえしのうれ川前の志られ侍ハ常陸の鹿島の明神といふて

暮あとくま　細　夕霧あり　え　何かしの海をて夕霧のことをまゐる時よ夷よみたまへし

の君をよみしまふ、そのありよ海りめのとの君はよもみそうるなれし

ものおしくなせし

細　君夢のかなをもたせて

まことさやしかりハ思わ

あどうよまたうれなる人

しもありしさうり

小式部みんなるてく　細　小式部

上東門院　河　仁明天皇承和

元年七月勅諸国守介ニ

以四ケ年可為限ト但ヒ

陸奥出羽大宰府是六ツ

官国始自筑前未遊ニ

在評量以五ケ年可為

任限ト

うられ経よこうろろいさ

かひかまくんハ　細　道の祖

もまつりてさあし

孟得分ちうきれて

此君の十ツうり　細　小式部之

任限五ケ年られこえ九ツ

十ツうりなるへし　師　おう

つきの四の年下つさ経く

そひまつくみにしまつでんをあくらおもしく

ろやそとなじしもうけしてでおかよう、山の

ろろまかりとてまひろらもいいまさくのこか

じ、小式部みんそくのかりかうんとするよいつ　仕

けさ経よとまろいさとひろうさく、くゑき　細親

也よひつくもがくしくものいでさうね經　縁あつかく

よどりさやまひしてたまへとするかな　小式部之

みも此君のよとそちらかへをありまくらそ　おかみうこ

さ海の、ゆくさきまでおくりけるとさとそ

あまく、紙の人へうち拝まりて、いかなるさ海　紫須智

小武上洛江川ある程よ
すりかのあさりくあつらく
まうでさんくるみもちとせ
すらんみとも
異事らくらみとあくせ
なきんく俗とくとよ
まうせてこよてまいり
うんみりとあり

とあつて三人 細お武
のかたやせ也一人ハそを俗め
せそとおハ二郎三郎
たちり
秘力のうくしどもく
細石とる君の春あさ〻
し寒回流 秋の孝養
とうみをおく盃おとの
おいそうして孝行うう
なしよの人とて
を人の情をとハ 盃銭鏝
細お秘の家父とハ
銭鏝の中みなもりくハ
うらかけり

よそられ給ふらんとすらんおもひし給
所々の地ひお給ひをかうじけるすく地すへさ
こゆれどかうしつと京よおちそまうて。
まうべきんでみとあつくをもらんみとも
おいひろき所ちれいいりしくやもうるべし
とちひりそきつうをこておびうし命しらへ 堪
どかうぬるらしくにしろめさうかをもの
こぐ三人おりよぞこの代まうまかて
まうべきことどもえ秘力のけうをばすお
りひそしろんいひ玉をうさめひしけ
とはうらの人みなもそくきれてむ
のりつべきゆくありしそいひおしかれ

もうろぬすん 哉毒く
しきの田舎人らく
ぞうくみとくら
盃おへ出とぞろうしせさ
くむしかへおまうさおつ
けり
ゆきしくめざましく紫
ゆれハお中のおらく

べ人はうとばぎうりゐくりしづきやゆへ
御どよ秋ようとおれいい義よ伝はちく
てさぐ京のいでうとえともみれどいぜお武の
中おわりけうしまの人地かりくるかうしく。
ときゐうさ風よ地ちうくうしてお秋よ
をおりくし舞をすぐもれじおおれびとく
のひ給まりよさくお思ひしうもとうきうく
きよしらよらく地うどのすうさへくたちれ
だみやそれさく川らしげすりんかせ
地用とうよおりまり志く拙しおみむ
川いうそいそすれぬおう人どもうらろが
けをりそこうそいと地用ゆゆしく

しきあひとあるどのの文
やうう海をいまくし
くめのしあどのあるそ
うらうあどへ 是ハあるふ
らよ云ふるのこもり
誰りと云て 云るある
あし畫るこどなるもあ
とこるあるとこ

めでたくしかもゆれどもこれもよくこそ
きこゆれどもたちまちはさてもさるべく
それどもうちはきこえのあはれば人の心を
とどめおほよそすぎて ぞうちの服ハせ
さうしもひらしくれば藤の武乃
ひまさはかすみわかんわるあるくつろの
まいかのみもゆくさくいはる海のしく
都よみそまりてちらくゆくよちてせり
らんはじきたれ往きいろらくくしと
ちひさしえまつりしうべきうともとろう
ゆはせひ拝まて給ちであどいひるけく
仏神よ祈とらうてらん念じけらじもとめ

いとしきなれ経と
細 第一の是よるそて
この新の子丁ん畫曰

むもしあはもり
が方りてありつききを
細 当とす

うちよ行うちにたちたうた
あ未てありつきまうきとふ
たり五百
細 うき
心のうちよまてそ
ちうりすハいとのうつくし
つきぬれハいとのかくし新
こどのさし当前心のさらて
さうしの新体の心のよき
ねるまう 細 年 早む也又
年三歳又九月は業家
れ後世のつとめあどよ
あく 和 泉よ言ふるかし
やうどうすうすかるやまた
産年中一年男さそう
年もいのてしのかいくし
肩 細海ニ 年三十三可
と引一男さて
ひせんのあらそ 細 佐里見
後肥前の頃よ任まる

がとゞのくどくもをし、あまよつひにうらしかず
かどもいでてまぜずまつくまよなろんのう
らよこともいきぎきしめまへど、京のほとりはいや
とんどもとのまくらまでつくつてゆく、りの出る
まことうまくよ、世をいとふきれよ出家し
て、ねさまうまどし給ちゝうらうよかたう
給まくよめひとつのおりていとおもくし
くめでたし、この、むし所へ、肥前の守とそ
いひけるぞのまうらいみともいいろうしわ
あ人ハかり、このかみ栽のむしまご乃あらさ
海をきこつとく給ひさはどきしのれ
も、いとしいまうしうちくしちゃくし

大夫のげん　細　監ハ太宰
の大監也相當正六位せさ
るゝ也のげ監なりて叙
爵ありけるが叙爵して
からぞ大夫の監と云之
是大監ハ正六位下相當
なるなれど従五位下に
叙しながら大夫の監
と称する也

かん。大夫のげんむしてひごのめよぞくひ
ろくてぐしこゝにつけてハめでたしおかうやうち
ひいわしきへ何をしまのおきくらしむくつけ
きんのおりよめいくゝすきさんのわかし
まるへうちもわかぬとあ何めさくらんよ之
ひろうけ姫君とさくつけくいさじさ
るとおかくも我へをうくじしてはさつかん
といゝと孫んでうるよひくみと。いとしく
つけくおいくいうでうんこしとおらうそおまへ
よめるんとしすいきをしろうれバいゝおくおや
まうてゝそしてけ出よしえをねことのゆのと
ともをしひよろそうくとくかくしハせうかさ傘り

細　何かをいゝ
ひ合く用ひ合力をぐ
しゝ也
おそらしてそかけるつ
次郎三郎姫の形でをそ
監が云よらと必勢の
しあよかくあるく哀なる
と云とと

わかるいほ
ゐとうにさ
よ尼よまうちんとおまへ
二人ありしと
いたうらうるもとおかう
それ三人のうちは
監大夫監の名をわかぬれ

ゆきはちのへかる
此様勢なくそしハ此監る
しのうく云ハ姫君の華な
ありとと
きらんへさまへてそそた
家よ養理の子ハめぐみの
縁のありてゐるべしとく

かなりうばゝかのうかいへ用ひをとうくすぐ
きゝとるとうらふよふかうりへとんどひ
ふうりきよそろ。ちぐうしそゆけるく哀と思
ゆへられどのくわか身のよるへともの悩
じうゝてよのふらいさひとおうりこれよあ
あれてハ監出よかうくうしこしくきられくいこのちうきせうかはめ
くひるんや。ふきいひとの泣すろとよふと
を出やよりすかんらん声しそまよし
られくハおまのうひうへおくらんこのひとの
く殺んころよかしひきてむへ家こそい
まは泣いかいふれざらべきころそこそ。
くろせんひまゝ出ろしあり　名めよゆけゆく

中のこのかみ
細 兄弟の中にて第一の兄をいふなり
扨お武の乃終しことをあり 細 忠の心乃あるは碁の心もありつし忠臣ハ孝子の門に出といへり 扨 其後など文の遣ふとぞ云く

吉浪も。そなたのうけたまはりのあらん。
まけじとりしねよりとりあそばしつゝ
もらんとしてんとりひ物どもは。いよいようしやと
うしてあられこのうへなりがたくのかけなん。
多く段りしもあいぐしくしくあらうしことゝ
なり。扨お武の乃終ひしことをもありけると
りまへこく京よおかけまりてんといふむすめ
おもおまさましひて。むらく君のりひあそて
さまぐへおそでも来をうごまはあるねりきり
よ人々なくくかくことなきんとゝて立ちよ。
さらりのこなりけまかつき終るんとくこ君ひ
すけくとおさしそ。我いはしとおぼしけること

きゆそいとたくゝろゝ
細 身路ハ兄弟よりうきを
細のまちうくたるしたなり
なさまかんくてそれ物ハ云
なれど諸かくの細
しゞからハ吉しさうてしそ物
物 歌集りそやうなる
ハこゝろん備補 なの中人の
文の細の字
しうゝとぢみ
孟呂 義藏
詮の義ゝ
細 みうらんゝ
みらう師説抄ゝ曰く
日 假借 貞観政要ニ 氣蒙ゝ
假れ人 和違へ 行ハ物
行よ教ハや書き
やゝの

多もてなひとく文なきとおもくやうなりまど
きこうけるうちまもてはらの志きうふかり
ぞしきうちよりれもあつぐおりしくうき
さりと物りひさる志ゆゑぞいとどをうり
けるえれりとこの家乃志らうをうさ
らひりて。年つれくさうら。年三十つり
かりゆのこ乃ぶけさらく枕くしくかど
まつくさとさるけ物あれども物りひあさうと
まさくおろおわりよろきもひころもゆく
しく物ゆ伊やのおひとうちうけるね。敬ゑ
いさうれくさえつりあうちけさらうん人
い教よりくれさうしそぞぞひとはいひ

みだれいはまことやうにひあ
つまりうち時しらるゝんよへ
ひとへにひたゝ
まだうへする志の名誉也
師 上詞は我ふかくおもふ
ところをうちいふなり
てんくし　細 いつぞ
我なくともも
も聞しらんばいたゞき
どもかの夕はあやしうなり
けり 細 三月あすれなく
川添ふあやしうなり
のかどうれり
細 殿少弐の役
母が妻也
実は少くなど添と云
おとゞれ 祖母と云
二条 祖母殿
めでしとそれげまして
おられへ今日八幡の宮
どりうして参りける
いふと
女君はいらしてよりけるまゝ
御方 おとゞのようらう
のかるまし　細 かゝりける
ちりうらうしきりつく
まことしのくさしはまへ
師 孝の字を帝本書
に松の字とする経
あのゆるよ 細 女房とも多
とふくよ
さ地きらしめも君いそ
いらかりめでたくして
くく 監が妾ともあ
みなへいつくし
ひとしうちを 細 同字なり
すまく 師 おと
ひかさなるよへとて
といふ 死人の事なし
ひなさき
聊字之
まず思ひはこの経紀の位への
細 御殿上は本書と
まことき地 師 帝の
后よも加ようなやう
まひつづ人とし 秘事を
タカク
事いうり
ちひてうちこし
細 からさうのしとさ
つき

されば御くてする是の名誉なり。我すゑね（細 大夫監がことやふ）
どもあやしうかゝりしところ。こゝつどや（細 大夫監が詞）
かくしてをばへめぐらいでおもむ少弐の
いとなさけび。きら〳〵しく物したまひ
しを。いかでかあひかたらひ申さんとおもひ（入魂と云ひしとし）
給へしかども。さるこゝろざしをも見せ
きこえず侍りしほどに。いとかなしくてかくれ給（少弐死去のこと）
ひにしを。そのかはりに。ひたみちにつかうまつ（細 監が世話 身にかゝりつる）
るべくなん。心をはげまして。けふはいとひたぶるに
しひてさぶらひつる。このおはしますらん（細 大夫監が詞）
女君。すぢことにうけ給は
れば。いとかたじけなし。たゞなにがしら

わたくしの君とおもひ申て。いたゞき（細 乳母をいふ）
になんさゝげたてまつるべき。おとゞもしぶ〳〵
におはしげなることは。よからぬ女どもあま
たあひしりて侍るを。きこしめしうとむ（細 監が召つかふ女を云）
なゝり。さりとも。すやつばらを人なみには
しはべりなんや。わが君をばきさきの位に
おとしたてまつらじものをや。などいとよげに
いひつゞく。いかゞは。かくのたまふを。いと（細 乳母が詞）
さいはひありとおもふ給ふるを。すくせつ（おもふことあり）
たなき人にや侍らん。おもひはゞかる事
侍りて。いかでか人に御覧ぜられんと。人しれず
なげき侍るめれば。心ぐるしう見給へわづらひぬると

まいらり　細　まいらいと書
こはわざと待之奥よ此
無教であらり田舎人
の詞つかひなるべし　輩鑑
みなひくしくしもせん
ほかしいつうまいりや
めさん　あいらうかたる侍と
もえなとしさんとうと
その日そらりもいふよ
盃　内むかへまでまとえて
あくや肥前国よいつとえ
いろへまいらんなどうこと
そのとくて　細　三月ハ春の
さその月こ申候なりける
うれさ西國などこいのだれ
んにちかいら　佛三月ハ春の
春その終りそて嫁娶の出
忌りしとさりへし
見みり　花　肥前国松浦
郡の鏡明神ハ大宰少貳
藤原廣純ヶ霊之みでと
山ハ神功皇后の和　え化
しそふとうれりなど鏡山
……も鏡の神

細　吏監ケ詞と
いふてまる地がしそうりりそ。てんが下まよめ
つかれおしゆれゑてりうとも。するふりして出
うしまつりやめそん。女のうらの仏神ハ左
盃　それよまさかは神仏るれハやそくの
のれよちんすびきまへるなど何らりかと
病とも言せさんなくと言と
まぞその国たらしといふよ。此月ハきさのそて
あしく詞し
わからすとも。ぬ井さひさしこしなどいひのかた
盃ぐハよ女まと
河りていくさしよ。らう三つらまて泪しうろ
細　吏監至、しもと盃和言之
くれハやつひさしうかひめぐらして
監ぞ　むろしなきてらと
まいのりしんさうはく松浦なりうぐとの
細　隣かと自称と
神をうけくちるりん。この和宇ハつうう由る
まこうとちんとひ結うとこうちをくまぞ
盃　其宜之
あとくそ
よ川りぞらぬくしゝや。あれゆもあらる

とふきこやかの詞よ松浦若宮同社なりしとあるに付て八幡と同神のようしをき
え付けりさらにはぐみの神よ此義もおなじことは依男とし　細　鏡の明神ハ武家あり
西楼よてんくらり廣継と御是八幡の二所こ鏡の神と武家の之細ハ奥ハまさ二八神
功皇后その此西年よハまふみしりておりすすめ郷の飛庭の二めさつうれこのめさ
弟男の肥前西へまうりて徐かとろが居ちうよつけく文をこせてく伊けり起てまらす
黒武ハ金兄んとあるふるハまうくなる鏡の神やうけてきまらん　師　廣継ゥなるし海
よ責し　盃　今監ヶ云ひ当て申らく今
あれみもおく夂ハ　細　我みもあるをあされしまる海し
邪の出ても京都ちうる悔し
いとひそしきまる云し
みつ肝とせんかもみれ
じくおわりり重りなに
とひ姫ひてとく
また人て　細　氣同けて
下旅菜どと行りてなき
此又美監よとうれるへ神
をつくしとふふべきこと之
監が云ん而とも云
すえひろり候ことあり
としりり　乗盃同
御かろくろの君の御業
とわりしにそんなび
なりし神をつくしと云ん迄

少將の姫とも
へくしすくくも地中ござしとも。ひきとめども
姫との詞
ましれどもゆめろうかりて　りのも地わり
あとくそし
そとそおられハ。いとひきしきさるよゆゆり
細　くまあかるをあそりの傍よ云り
まろひてくらひれまくよ
あと寄
年をとくいのゆくさがなる人猿
神をつくしやらんとまくりしあされ
監詞し
青　まそや
とふいでやこはいりよ地がさうろうと。ゆく

そやこハツるよ　細　監とて
とうかるゝらし　孟　春　表紙
まそやとかう〳〵字画をし
あらしまて〳〵のらく
ひもあさらハさへそそど
らづらく　おまするはま
しと物をしわづくむとこい
ひつまどもし此守の紙を
のづくさしきしハそを
うけり
此人のさ御ことくれ　細　此人
ものさまわりとふらと
もくらくく紙つてご染画
あくうりし此代ものさびひ
あまじ称ともつくしとよ
ふぐさゝくし宗れもとお
らぬさ御よ用く人さう〳〵す
経紙物絵くさせの宗筆を
の例くし　孟　じまかどるる
の相く御のゝかとさらくびさ
さう人へ論ぐらべとに　監　の人
のらくしとうくしとさん
と諸さく云つらく　おうさ

つまりよりくるめてうけらひよ。さべくそれ
とじいろりすく姫ぬ。じまわもちはさは
よそじんつりくまくひてこの人のさ御
こよりわし給ふ。さゝきすゝへ給ふは。
つくさすまん。ゑす我ほ侍るくさき人乃。
うそうけとくらてひとめ給ふありやと。
おりしこれくらつまりれ。あまりかしらる中
ひさうとふるとそ侍れくらかしささ
とよへるつくれ。我の人とてもおよそらり
くわらんされ。老りて侍。なみ侍しあれつり
そもそも。又まんとふ人へまいとも人へもやみ

のくらなり書ハわらじもとよりくうてけくし　師　じまめの相くあくらよ　監　のツハ
しらりまへハあうくの筆をれば身此師と称しもらし此書、さうつつうらん
と云を得りくらつあるう事そとしもされとこさらくりんふらそとふり
おいさりくし　細　紙体もくしふりくくさまくわらしらふさ　紙　おいゝ筆うせ紙細し
ふうせ宗死物絵よおかいくさるりとよ細わり用し
まうさ　御んし　監　乃文字をとまとくさんどるそいおらくしまさ宗らしむよ堪ふるとし
まれくのさらうしくハ
細　まくの花實もさひ
あいさうらし　新叶くもあ
さ花實ともふらく
此けんよみあさまれてハ
孟　積よ　さびてハらし
もあしれぬとし　墨梅
あらされて、梅とてあや
うよせられてハしの證

ゑんいぬめり。法師がかくしつひとくれさう
も。いしおもそうしくんらしてこの老後のそ
けとをもしれそ。いくばくつりすまつるへるん。
うちらひちすへさ人へあるのまうれくの
らうつらいこのびんまかあじむらすうれと
くおまうひよらうびかんまかさまれて
いろいろの身ぞうるとんも露をしるすん
めうへるぞうとびうめとわやらんとそひさ
づくひまされど。婚君の人とこれとかり侍い

いさゝらし　海　不生也
盃かくくのへいさそてあ
らしらく
いかうとさらも
其夜分が髪あわ男女ど
拾てかうくと上海く
めぬとりしハらくよ夜
かあり

とハいける前ましく
肥前ノ佐かきとと
とハあり

さゝ波のいとゞひろげしてしてはさゝ
らしとたひたひまつるごとうりよ鳴は
ゆれハげしとしとたひうまつくいく
さ川ハりくとうちもさし以へぬりう
べとすくこのけにとよいそぐらおそき
といひしハ今ハ若アの玄といふ其あらひ
てあらゆげいぞく舟よのりけるむかしの盃
ハ肥後よ入ゐりいそて四月の九日乃程よ
ひがりてえんとする程まりくてかぐる如
そりおも坐ずくハおいひらく物くえらそ
さんげなきよわれありてあひうえ
しのりにふ浪ちかまよふしへつらありてとも

まうくの立め　細　称して
もさひおめへことより
明ぐら濃ら川のこぐ波
のへ若しバ却のつくに
いぞしいをりしとゞる
かあわり盃まりらき
嘉とらればまられん
ますハとのらく
うき浮と　細　若表此前
せうこ勝ハ名前へされど
是ハ名前よいかくもと云ら
こさうかぐらりく　舞らき不
とと云らく盃わが、かき
いつくもてもうさこうあ
とりかくし長かうさこあ之
帥られハうき雨ととれ雍て
も前若いりしとく
わすさまも　細　若狭男の前
のよまくまへたらむ長之
みわ末とそしも風波よ住
ぜうくし盃こらく考
うきさらめへくのらく
ともふ又　海　舸　古義爰漢語　按ニ波夜布袮
万葉集もわしらやふ舟と

こゝよう程ぐうさこうしくめかし、さ松浦
のくらの前のなぎさしの婦けりとのま
らくしまんハくりこまられてありうり
もう
若志方　古注
浮鴻と満ちすれてもゆきやいそくと
まうとちうしびともくられ
明らかとらしゐ波路よ舟出して風よ
まかする身のそうきそれしとわちゃうかさ
かうしてうら所めし、そうらくみけぬから
うしとのつくしいひおへ又くつぎけじむ
しねそ、どひさらんと云すまころもまと
ひくぢをや舟といひくいぐ海にとよるるんう

あかし云云　舵とりや舟ハ艫
ともへさしてと云
ひゞきのなだ　河　方架才
上とよひゞきの灘とあり
播州赤石云ひゞきの灘乃
灘ハ播州にあり俗説ニ
ひゞきの灘と云ふ云々
細三光院抄名寄ニハ備
前にありと云々　忠見集
まで　ひゞきの灘ゟころ
むかしの後のしまとよとある
まそらちくろ
海賊のひさふらうらんよ
とも　海賊の一向ニ付
なさんのかも後段監が来て
けとらし
うきこと　ひめのこ
細　正然宮の前に又後兵
ア来とみく監後先よ
用ゐく　河　所居捕使追
そへかり　唐泊　備前
うしともり
あり落　公のそこ人よ
小舟ニ泊りしかりれば行り

まへよりくれば、ふくこの風さへすくなくて、
あやうきすぐくしてそのわりぬひゞきの
なだもあすこしはすぎぬ。海賊の舟は
やわらいさゝれ舟のよふやうふみくらさ
ばらふ物あり。海賊のひさふらうさんらう
も波のそうらき人のそひらゆやと云よ。
えんらさなし
うきことおもひのこさぐひゞきよは
ひゞきのなだもさらしすぎりくんじ
あしいふ名ちりつきぬしいつまぞむど
しいつきいつとらすまいのふみらしら
うしもとりしてしりさいとともぼ

意又よのせうらしく
すゝハ唐泊より河尻へ
三日まりくけ於ゝ家よ
唐泊より河尻とまで
とうらひらく
我とおもとおもひて　それ
かが妻子とど監がされ
とふむあまりよいうぬ悪
まづつわらひんとく
すらしふのどみらて
主のかりしはくらも忠
いぶりしど今ふを云ゞ
まりつくといわらく徹ま
しらこすらく恐てむく
忠思おもろくのこめのを
云てみをとくらこぶるを
後分のふ如来されわらし
関の地のせいし　細
のまこう後文集詩戒人の　バクコ諦
妨のらよらくおかくら
全篇をえるべし　河　涼源

うふふし思の、あさけるさきも家よせすむ、たぶ
後のもとけおそれはよすろくらうひすさ
ひそいつとれしらめとも忘ぬとそ、云へ
見え
ばけよそこれらすてげらいふぐかれゆく
んちらくしくいかのてこたけとたふら
ごうどころいられわてさらよろゝ我とあー
とおもひてまへむらうていかでしなを
らんとせまよふゆるすくもくろうるゝ
でありけられとすらしんのともらりてぞ
わさおしきうに我とひつぐらよふよあく
おすられぬ胡の地のせいしをばむなしく
をそくつとすみと、云ふのさきさくて、

縛井不得見胡地妻児虚棄捐 白氏文集縛戎人 愚按これは漢より胡国を攻めし時漢の
軍敗て胡国の為にとらはれて四十年とゞまりて後に又漢より胡と
合戦しける時その人は漢にかへりけるが其ゆへは胡国の妻子を捨てかへりければ
胡の人なりとて漢人はとらへてうたれけるは今思ひ合する妻子を捨て悲しかりき
胡地の妻子を…とかや。此詩は又文集の涼源縛井は胡地の妻と漢にかへりてまく
つらきふるまひし

ふるさとてもろこしも
都能はみやこなれは人は
つり遠くなりつるも
家に帰人もなきさし

九条よりもうし 細 乳母の
こはれ人なり 杰 家に
去りつらし
とふひそ
そよなからく

秋なるをうちまくに
細 三月よりさひへきて
ふる雨よとろくし 萩
よかなる世の中の
是業の後は三月の未明
のちにかへて今京へそ
秋にかなわかし
とみゐるの 細 古人さ
まくせし武者別れにも
あり十年に及ぶます
胡地騒鳩在河州どこへ
ゐるを楽とゆふるにあれ

(若草君ぞ) けにおやこのちぎりもしだいにさびしからず (我文をほうむるの)
(かゝるうき世に) 人のならひは何よりも縦よしなやそのかみおもひしを。
(其の人ととふべき) いまはやりふらんしも海ぐくなひつゞけし我か
為かくさしよくもこそあたしいまさらくべきあう
まことおもしあはれ人をとひまたくべきさいの
わかれ人と思ふもそでひとへの水のかはあ (むかし一人のゆまし)
このかごとらの年月すぎるわかるせらい (こしのゆき)
とくまれてくるへる浪風まて／ひて (細 其跡にて)
ひえづらをそうれしこの人とも。いふめりに

ありさんどすからぞしわかされるゆかりを
出でいつゝいかでかいりなごは入ぬ家に (細 家へ入て)
ひとまれてかの人の跡にもなりをとまら
らひはいかなる (出家の富ともかく) いまそ残る (九条の子)
よつて
しらぬゆえどもなかくしさん人のそこここ
ありさりのものあはれおやなきいらめ (盃 市女)
あきびんのなりゆくいふもく世中とおひつ (商人)
秋はなかりにまくにいろさゆくされ
おしなとはなからぬ後のすけとつさ
のうじ人までの水鳥のうかれまくへ
らちなくつれくなすしぬるさ夜
のふ川ざうはなしよまくつんみなし (入此世へゆえもいくとそ)

ぶんさく今まうべもあるき
もぢさ北ぢらまゆきいふる
といふうくしおに三光院は
筑紫の名所なりとなりち
都しられが藤は何くきら
やうあり訂?筆云去
ちくかんふかうらし
紫式部のもとうけしとあ
馬場?蜜ゆまはきれそ
さぶはくりとあり
人のうりの御身は
なろうのよあぬは八?を
持ても不若となり
憲宣れのいくらいは絵実
く母のふどなぐさあいさ
かんとてもろうなるべし

さるすく人世さるすくいろいろしうらよけるを
世りよおちかきびはうらしりの犬も。あ
いよふかれくおけきおうすとのらふくらん
ちりぬ。すをけらべき。やくともすさと。ちらく
せうぶわりられすげるいと。しゃれ。おいまく
うこの御身もいとやさしく作り人ひらりの
御身を人とまりていづらもいはらをとま
うらせさんよとろわらぬし。桜ふいかど
きいを側ひよなりてとげく来をさる
りのくるよろふうしまりてはやるぬ
ぶらうせをしととくうひあくさるみく
神社こそはきさらへきうさめをらひ

やりこのそめともりいうして
そでもまつりいのりや
まひし 松浦郡蕨
河の郡名八八幡也 松浦主
あましの祝あり。風土
記に神宮皇后後石
よりて後山にまつれ
そこと・いりゆて一所
と云ぬ。細 松浦ハ神功皇
后後を埋まりしるへ
し 師 神功皇后ハ八幡
のみちれハ一所なりといふ
こりしりて 細 八幡さ異八幡
ある八幡るへぐらりとなん
一様八幡ハして法師の
うさえるんへすふ八幡に
ろるをるるまそや
河与寛歓八年別当安楽
之時以運如法師始補
五師云々 師 是八幡の五
師之村上の記薬師寺
の五師るるすありと河
海よくらし
松の中に 細 世喜と江

なりぬいめぬらんいこ 行はふやそくこのふぶとなりハ 山城 八幡也
くこふみくも気り移りよりのひとし松浦郡 肥前 紀
あぬし社也。みのくふとくるれふかくして
とあろくの私しそしゃまひこ今すより
てうくあんけなりしとえてまりのおれ
くろうとちやくふりあへしてやいくこにまう
てとせなんそのおくうらさわりろへはいひ
おのねぐらしりてぞやくぬしやのうく
ひしなともの乃これわるどもびらりてまんぞ
せなりつちつぎそはへ江の御なりゆはなん
きらん日の本はしまはおれしこれからさまあ
らし給とおわらし…わぶんはさうておんなり

ことにうるはしくとしらぬ役あれど仏わたらせ給ふ川ハ同しきなかれなく
て川をとらん 河 縁起云長谷ハ神河ノ浦北豊山峯ニ徳道上人建立十一面観世音菩
薩之利生道場也十一面二丈六尺 文武天皇御宇ニ徳道上人造立之 法道仙人是也 神亀
聖武天皇四年 公家被建立堂一宇ヲ云云
ゐらくしまり 細 縁起にみえたり 河 唐僖宗皇帝の后馬頭夫人の形みにくかりしを
を瀬路なりよ仙人のをしへにまかせて東にむかひ日本国長谷寺の観音に祈請申され
一夫人の貴く備はりて……
瑞正にかなひ……
河の未来……
まして我国のうらにこそ
勅をうけて……
偈頌をとなへ……
らかしまかせてわが衆
みわが身……
うちまもりて……
利生まあらはりきらんす
うきくひるさきとさらし
ふか君とおもひて 河 徳道
上人長谷寺建立之時開
御奏聞して 勅成之同被
上人聖朝安穏萬民繁
昌との請の由見縁起ニ今
むかしハ若武様栄繁
みなしかわきされはわれして

ましてこの国のうらにこそ。ところさくて
のさうひとそしる。としへまうひつれハわかるゝ
どばかりしてめぐらきまひてんとそしていづし
なすらにしてきしまうらうこころとこめゆる
すしろねらてらよいとゝひしく〳〵海
しそれど人のいふましは物と物がてらでしあ
ゆき給いろうつしふかき男かくうら
まさすしふらんわかゆやしまなすし

くらきうしほりつらくと 細 一段の趣意……
ありかへ海を 細 三条
みるく歎かれまする母上の
法服をそく着し給ふる
たり
ことあへしいとしく
いふハ観のくすりとの歌
ここまかりしに今ハ分身の
上のまかりきこと
そへく思ひしことし
つぐいら 細 長谷寺の
あくらとらへ 河 儀式帝
大和の名所くはしくいらは
はくさのいらとも云能
因哥抄ニ……清
少納言抄書……
あるをは来人の此そこ
まとさりうのハ観音の
つ事あのしやあへ入にて
とく 小右記ニ正暦一条院

細 一段の趣意……盃 雅 行どの
こと様をき表とかくさばゆらぬらん所
さまひまへかし世にゆきらせばなかせま
し眼を手を合せてかりわんと海ど
ゆかしねがひひや給やましふひとがら
のうみしさぞすげきまさり給へるふかく
さうあらて男のうらあきまのくゑ
えしいとしく妙かくつらうしてゆ
だいらとふ所よ四日しいかくの間がう
よいけうらもやでいきつきまつり。
あゆむとるくらくつろひされど。
あしのうらこうれぞきひしくれなどん

九九八参長谷寺ニ干時至椿市ニ今弘文参長谷御朝燈心器等ヲ参御堂ニ修誦誦布施等
御朝三方灯云々此物語よお叶へり
三人　花 姫君お我の好
宝長ア君氏と人〻
はらさくつくらく蓋堂

細 椿市よりありて用意ありし　花 未の刻
王記云延長八年作願文ヲ
遥祈長谷寺灯明十
万灯云々 小右記略之
家あるじの法師
花 宿からよりきこえは
ゐ人とやどしられける
の法師来て
とりふく 細 別の人とや
どきこえしもの
愚案 椿市まそ

なくてやすみ給ふ。このたのもし人なるす
け、弓やもちたる人ふたり、さてはしも
なる者わらはなど三四人、女ばらある
かぎり三人、つぼさうぞくして、ひすまし
めくもの、ふるきげす女ふたりばかりとぞ
ある。いとしのびやかなり。おほみあかし
の事など、こゝにてしくはへなどする
ほどに日くれぬ。家あるじの法師、人やどし
たてまつらむとする所に、なに人の物し
給ふぞ。あやしき女どものこゝろにまかせて
とむつかるを、めざましくきくほどに、げに人〻

けふくるぬ 細 やどに
ふりまくの事なるべし
細 先右近か方のまゐる
のまのわけは右近か来
る心の給はる

くるはかちよりなり
廿人は家の奥に入てかくし
君をばしたるをもやど
をとし
ぜざうなど
こつゝもう障子のやうなる
物也 細 幕也 軟障と書
幕のやうなるものにてかけて
かくしをたてゝ隔つる也
へだてけり

ぬ。これもかちよりなめり。よろしき女ふたり
しも人どもぞ、をとこ女かずおほかめる。
むま四五ひかせて、いみじくしのびやつした
れど、きよげなるをとこどもなどあり。法
しは、せめてこゝにやどさまほしくして
かしらかきありく。いとほしけれど又
やどりかへんもさまあしくわづらはしけ
れば、人々はおくにいり、ほかにかくし
などして、かたへはかたつかたによりぬ。ぜ
ざうなどひきへだてゝおはします。このく
る人もはづかしげもなし。いたうかいひそめて
かたみに心づかひしたり。さるはかの世と

年月にそへてまさりゆくさま
ころなしらへ 細字の上
のあはれまされけくし
ここ文いひたるいかれ
へゆかれはたられふへ
さいかうよ連て 未詳
さしく

まうり物ありへし
おもうしのまつる物をも
歌の所れをまうすふまと

わかすこの人 細川家に
うらつてはるくして主
思ありとぞかしらてし退

いしわくとし 名母せまま
地して歌の所のわかく思
徒をとあかいへみてうおとう
くちれはおもりしく此分徒
久しく田舎よ侍しに
ミつらへしうちく

書きこと 在太をいみ
し内ハ此人兵衛尉を云し
とならわしうらて 細若後
の分のりし此の此名又例
わり業 文の兵衛尉乃
ばまりてきる阿吉郎子
にまかせ姓をつゝへて兵衛
ちといふる異此名を例

あまりにひさしくおとづれざりければ月ごろ 細川の主殺を訓
つらしとおもひけるまゝにひのつらさをくらすかり
此男どもはりひさやさてこのかたくなかりん
まびくまらでげるまいさすくびとなれど
やもこうまへらうれどもあれこそ
へだてぞりわしこゝに此君は後のまことげど
かたのどかやうのりまよりこゝそもまうり
りのあらへしとてそてづくしかたしたらん
いかまへよ気しとまへげいたるどうらわい
ひぐしうるこえしらうしやとうふぞさうしよ
わかすこの人ゆはおしくとそのひとくりの
くぶ偖しりのそげれどのゆくくのかし
くちもと、非とはえ消しぞ、いとわかくつき
徒どもしよふしりくろきてやられれど、
ゆかくのとしへうめるよいかとしきこわ
ぬるうたり、三条とうくよめともしびもする
女をられいやうきこしへるかゝ枝けりさいよし
そじへられどひまししうつかうかうされ
て、うのうくれまうりしけむとこうまでおり
しりのあうりうりときゑゆし、そいうどしく
落のやうわり、おつくと咲かちさきへいけとゆ
うしかれど、こゝへくもりかへぞ、ひらびて
この女はころん、無とくづくていひしへも、
これよことわしと姫君のゆくそすらうや

あり姫君は酒にあらくさ
けりいへしとおはりありも
くらつけなりや
おぼえこそ三条今物によし入て
おぼえ侍らむとて侍らぬとむをよそふくそ
るをさいふんなりぬいふよし
そうらうし此三条の主
あらうさへせうらうあるへ
あはらひしわらわあり
しおふ手のもし
へうらじてこそはやかしき
こそ　細　つく物あるを此
三条ふ不審なるひとびと
盃なくさてその三条殖こ
あをうびさらうひわらう
細　綿と絹て赤く染るう
きのくも花　掻練ハうすき
紅の衣のねりたる也
どいふ中ひらとい
小説どいふ也絹色
ふるしといふつよふるとも
此きこてうつし

軟障のこなたはみちなるへし

おもひよるにいと心もとなくて。此中へだて
なる三条をよばすれど、くひ物に心入て
とみにもこぬ、いとにくしとおぼゆるもうち
つけなりや。からうじて、おぼえこそ
はべらね。つくしの国に廿年ばかりへにける
げすの身を、しらせ給ふべき京人よ。人ちが
へにや侍らんとてよりきたり。ゐなか
びたるかいねりにきぬなどきて、いといた
うふとりにけり。我よはひもいとゞしられて
はづかしけれど、なほさしのぞけ。我をば見し
りたりやとて、顔さし出たり。この女て
をうちて、あがおもとにこそおはしまし

其のはこしかくとかくさせぬ
なり。細　夕良上のこと。いく
答へらうし。師　夕良ハうきを
あね君ハ今それとも云お
んもあんなく云へハ三条
らんども云かあく

ひとらく。細　夕良上を
つまりくいのなる人ハ此左
なされたく。師　夕良の
書かも右近ハこと入く

あれうれしともうれし。いづくより参り給
ひたるぞ。上はおはしますやと、いとおどろおどろしく
なく。わかきものにて見なれし世を思ひ出
づるに、へだてこし年月かぞへられて
いとあはれなり。まづおとゞはおはすや。わ
か君はいかゞなり給ひにし。あてきと
きこえしは、とて君の御事はいひ出ず。
みなおはします。姫君もおとなになりて
おはします。まづおとゞにかくなむと
きこえんとて入ぬ。みなおどろきて
夢の心ちもするかな。いとつらく

これはさしもせぬなかり
あどろかりとめのし乃
つくつくといひつく
あるいのやうへきりきなく
なにさうなす　細　あるたに
なかれたるゝ御面白し
師　其まゝおもえるするをす
てみより
まうう意は　細　紙墨之夕
顔　工　ぎりそり

きこゆくみなりひさこゆう人よそいめんし
めべきことしものして此へだてようりこゝと
まゝけどほく（前よ奥よ入軟障ありて引へだてたる也師）へだてつゝかやうぶる御あの
なおもすくなよしおもけらくずいひやう
こゝろすくるきかそれおいたへんらくわが
いりぬ御絡かしいらのそらしろ夜よ
てきおつしあとえんとく気をとる
いまどころのかたる世界よふく風のいとよ
ときえさてつらへしそのわくぬといふこし
くれしとぶふよおいの身れこゝら御
いまふらもいしんうきれどしらすへしなら（夕良の枕）
さへるまらぞんのうらしく衣ぬらく

なみちのおから　孟　冥途
とえ死去の旁ようけと
めくろくんとわくと
ふし
まそくらさ待りく
花鳥之　孟説也　細日　此卷の
ふし　孟此大きとのきし
うそよけらとまつくと
いわかれ世のよろしくく
いそやきうして
細　夕良工此世よまり涌さ
ぬかりととり
三人子なく　孟　工よよる
三人は　花日　爰葉　此三人
右衛門佐三条死はふ
其ハにさ云頭よ右衛も
この所にも云ふ
田られぬといらうを見て
このうしのとくも
孟抄　前よ此ゝころあく
のうるとてもくしゝ
くらへるさとらう程よ
田られめぐみうし肴
尾さきられいそても礼様

ますをようらの行にしよりてちく
ひさしくるんまきぬめきさ待らとうひ行
くれば君そのあたりはふりひるうつもこと（細　師　夕良死去の歯）
まうそいうんりこゝすくろくしと給
すんどもいそやめしてもくしけかしうこれ
さやうらを紹よきうしいふかきよ三人なが
らむもとろいらむつしくきことのき
まる田られぬといひそぞこうてうありしか
ことをさしてえんいひそがいほどはずく
いところあつてしくてうちわらうがと
わとうよやしいへどうらこゝよとこのへの
あやしとそべるれば此すけみることと行

市の宮とゝ云列ゝくと
いふく
ゐるいひろゝし来ねゆう
しゝうての　細ゐかゝそ
三輪の社ゆ近代市の宮
ましハ今さゐゝるよ
前面をおもして今みそ
のねゐらんきれ
いかるのゆん　細一本の
しいひとくめくめのくゝ
わらうゝぬぜゝらろく
のゝぎうけ、こゝろゝのく
御用の時ゝ、出ニかも
のなり
いとあそうしく
ゝう人の今まてゐる
ゝよみさせしゝさと
とふへし
たちまつ扁ハ弘の右の方よ
ちらきこゝまよりまへり
長谷寺の堂ハ東むき
ニ右の方ハ南ゝ南の方
の扁か　ならよちらゝ不

ニ夜ごもりのひとゝぎとあへるゝと銭も人をも
こゝろよそぢゝしくはあくぞうられあゆるさ
らぬかたゝせいひともれどめともめてこゝろ
よあるゝよゝ川くしげあるゝ河ゝろそれいの
といてゝやいまてくゞ川ゝゝのひとくめく
りのさこしあまへるうゝいとゝきこうげいとあ
うこしくめくゝしくゝ也ふゞうすしゝう
しゝとゝきすゝけるうしあるのあれうゝひと
あれてくゝえゞくゝてゝよみそゝらこの志ゝとり
まづひとさえつゝそゝやあすゝなよ得
まぞのゆうまへるいとさゞはしく人をま
らそこゝそのくゝちらたゝをの扁ハ弘の右

この御師よりくゝありしゝらね
花ゝくし人ハゝゝふゝそ
うてまゝでゝられハ扨り
の師とれゝゝらも坐き
くゝしのむゝきをふゝ
いゝぬとハゝゝし方右細
師の有免すゝぶうどふ
うゝらねだゝあやとゝゝ
ゐゝと親をゝゝりゝまの不
来るへゝゝ仍て花説世云
ゐるゝ　二去ハ流御説も如
此ゝ御ゝよ成り
此ゝのゝゝに云ゝゝゝ御を
宝ゝ無量の扁ハ来のゝさ
あれハ右ゝぞ扁よ宝き
ゆゝ右ゝゝ扁ハ弘よ出
ゝあり堂ハ東むきく
細日御　堂ハ東むきうれ
ゝ弘ゝ宝きゝ扁ハ弘へゆり
ゝうゝ右ゝハ弘よゝうけ
まゝ本の扁より八扁の方
よおくゝゝおうゝゝ
扁より右ゝて扁ハみれ
あくゝゝ、ゑゝしとく

のゝさよちうゝゝまゝよ志ゝくりこの御師ハ
まさふくしらぬたゝあや、みしのまゝよと
うりけると、扨らくよおりしませとゝ弱く
してゐひされハ帰としどゝを侍らとゝ
めくすゝけよりくしいひあゝと志ゝこ
をすこよゝ川しあゝくゝのやとゝこかゝ
出いゝくゝ今すゝゆう伝りそしもうゝね
出どもゞ今の名前よゐるんさふゝゝひ給
志ゝきゝとい何しとゝのゝ何か為中
びゝゝ人ゝぞゝゝやうの所ゝのいゝうゝよ
ま抱ゞゝものおゐつゝいゑゝすゝるもぞ
けるさゝしゝかりとゝそ如後いとを出

せけるがりくゝし　吾妻鏡
よみけよまゐりの海
じうの三ゑしせらてしるく
今まで後の三ゑしつくり
くらかりしこゝろハ仏にして
源の威勢にて入道は
新して人も狼藉が
とかくもいふ入れかとゝの
りさにおうひつくらもこ
なるよ裕ならしらゝハん
をもとうくんと思ひてま
こゝしはしとく

それどもかくれなく三ゑこるひのまつりごと
まつさはりしてまかり出されて仏道に入りて
すなはちかの心のうちよこの人々いりてさ
つゐにこそしんしやうまつりつかまつりく
そて三すれバいまはたゞひのごとし捨かく
の多けれバそし人の川ゐさうしかりく
めりよ志かくもなりてさいしをおもくをすり
のみなどかくもかくしりおかしげ入道
くぢやうでしたがひ其世のうへの小方も
まうでしりくかりいりあしくいきわたり
どことやうてこの三条のいふやうに大ひ
ほかゞらくもりさしおりが姫君大織の小

按れハ大織の小方の許
唐くるれぞ三条がい
つれしく思ひて秘念を
こめたり
花四海安危照掌内百王
理乱懸心中　文集
ちまかり
れうしつしも
の御むかしあまそわる
御らくあさしきうの
受領などの御まつり
まりよあふべきさまつ
とあり
わるゝまかへ　御　わるの
りましまうるへくえ
太臣さうらもまうるへと

かくれなかりしくの受領の小方よりあり　何賓之
まゐらん三条らとはすらむじよろこんで海
里下へりうりまうへくとひさいはよりと
むすこ会じ入りくとうたよりいくとゆくえく
きりふかれとはやていとりくくしそのまひ
よかれば中ねどのハ首の御発ししさらよ
ごとはやしまうてよりて今は天下をれ
んなりけ絵へる太臣みくいかぐらかり
しとれるまれうちさしを受領のあつかく
あれさびまりてかいしまうんうといくぞ
われ見まうへ太臣さうとをおぼしてたい大織
のこしらの人のあれのそくの観世

ぐゑゐのあなりとんよりあまへるとあるしてそとハいつるよつねてきこえたるとせさしと
ことゝ毎へとなむあり
大貳のこゝろのうへの　ぶ 大貳の子息と云也 豊後 大貳の御館の当方と云々へ
新世音寺に　細 筑紫あかり今に東寺西家の官領也 并 まくらの御局も観
世音寺同じく清水ハ在家の名く 河 在筑前國 沙弥蒲誓 観音寺建立也 則
別當也 五云 花 八幡に對して松浦箱崎ともに長谷寺に對して参詣するにしかる
物語の作りなるによりすきまよかりうつすへし

寺にまうりつゝはかなひくらしのこゝも　孟 ひのかひとるとむとに会之　あ中ひかし得之
とかやいとゝわれ、あわれにもつけむとらう、
すきまにてをひきなうつれ　へて
細 おいうしく　とり、流くしんへいこうしへとはさし　孟 系茶之
またおもふいたしもやそふなりうしくうら　おとはし
人とんたづねここくんとて　類之
つねてよのどうよ世はしんとそこまへ
大とり 香椎之　そうりしたる流しひそいふはわかうしふそかて
りくしうりいらんなしきまうの人かららくし

みなりしやうと 所願 細 飛文る
らへし
そのうちの人かなとくしく
ましとさせうれはつるほす
細 例文ナれハ大旨
特にあんてなし 所 まらう

ぐしつゆく飛文の比事を
こすやうりりきさまへ
これぞ例なりかく
もあり
思ふ君 細 あふこうの童
思ひ師 以中將の子教
源瓏瑞君とそえ
其の人らの比ろすん
細 わきとすむこうらう
意物之
思ひみてとこと
細 つけ宗に推を 兜 核
市の家へいあくを御堂
の房にらる蔵坊を掛り
とまいさ遊ら御こち
ーー
思てなきさ
ゆりひもよりで家様

ま飛文を比例え　うつくしきさまへかれハつきのとしてまいの　あとの大臣
ふぢハらのあるかき君とらふかへりあまへり
すゝよくいのりもすへて人はゞかるんを
まりつぐこころぞの乱もしらずはかなへ　細 こゝの人の心也
しといふすくも義ありつ例さいひとに　大夫頌之豊後
あいそゑ之　こゝろこしうかよりくいのうち持る
思すよそを待れとふいとさはじう
秋ひとよいとこころかりうあけあれハ思れ
ぶ大夫の坊よおりぬ物語こゝろやもそいと　世子のうち　童ハさいへうし
さゆへ　なぐゝし、作家のつくやうれまへる
づーげよゆかりうち海ひとめてゝく
こゝろ 思てぬうさまじらひとそして 物の　細 おもひの物語之

まだつたふる事はなしかり

いとこよなくおぼえて
源氏の御むすめを紫
上のかしづき給ふ也

くの人をみるにあかれどものうへに（細 紫上の事）
ゆかしうは侍る人おぼしけんさま
まうさまのひめ給はん御心の（細 明石姫君）
こゝろにかなふさまにおぼしけす（源の心）
づきなかり給ふ御心もおぼしひながらも
かうやつれ給へる御心のまゝに給はせ（紫上明石姫君をかしづき給ふ）
くちをしき給ふおりぐゝあるべきをのせん（源氏也）
らくさうどの御町にちかうこゝの女御
右をいかにもいのちながらへ給はゞ
あつかひ給へるにめでたくも（細 藤壺女御）
右ともこそしりし姫君の御うへも

廃もすれなかと
源氏の紫上をかりしとはおぼし
をしらせよおぼしてはえのあ
かはなるべし
歎きなきかな 細 是よりは源氏の言
なすと案ひて源氏の御
心にかなふさまのきこゆと
師源の御ためを紀と
自称して紫の君に
きこえ奉る事をのたまふ

かくれなり 細 おもひ
らはやかりしまゝの地
になり

はかなきさんとはいつれをもよやあつ
かげもうとかのし給ふよりかりつはよう
の右の御まゝ（右つかはしたまふ）給へのさがえこそは
きこゆるにゆかしき世に、おぼこりこなり
めぐがいりみ給へなどもこゝろさしゆめ給へん
の御心にはあるべきを給ひらん
るんこのふ廃もそくれこりのみかりしあ
あなとこそにむかくはすまりめぐむへのくら
まはゆ給ひにこ給ひん、我おなしびまへるこそ紫
いかにあるまれとらんばさつれさこそ給
ことするよ命のあつれ思ふ御心どもさだめ給ふ
まづはかりしまゐるんやをするんといひ給ひ
といづくをとり給ひん、損はいはれある御なれ

いまぐれさきをるすれども
細 河海花香も用ひく
而上﨟をしるされてしよ紀
人ハあかきのどかにしてれくと
花 櫻(ヨウ)嚴経ニ云 世尊頂放
百寳無畏光明ヲ云
今案 仏の光明ハ眉間よ
つきもえ足下よりも放
しの人ハ金御身を放れさ
或ハいふさくし其中に
宮上ハ頂より放ち給
いふへのこめけるとて宮
よハうぎりおうう喩く

ばもくれゐゑひしそいさゝかとゑふするれども [illegible]

[illegible]

いくゆくとくしかられかす
めへられあつきさつり
細 ……とハいふ
……
……
とえし

ゝ出なりけり
孟 ……
……
……
……

[illegible]

かりしき涙　細 寔まそ
らうしき涙をさとのまゝ
経おりの師河原院よ
て源よ夕兵のあひ来ぬ
すくをまつるすかり
へし
まづら代はあこくおちり
楽のおもひきえぎりして玉を
あられとかをよのき
しし
んのゆきさみのうれの
細 そのちごいちゞをきんか
さみつらいしどそとれ
来提 おこその著時あかり
一経いざまに持つまり
これ夕白の君へも使を
をとおぼ縁も文表さり
しとらく
お武のかりまする　細 お武
よならてくどうとも
源よりとまでひよまり
うりしどみつされ
ど見の時もえずぬよ

よわりはてし涙などこそりわぞくぶるよ忘　源の夕がほ
のうすきし
生いづくれしさとよふすん姿おかりて
源の御まくとの帝と
あれぐそりよこちんぬみすむくみ　おくりても
きざさらくあもるよおきこ代らべしおち
ぶしん心はあるきをそとそのうえすら
のまふかりうつうちのゆきさみありけのこと八
まうげよりのつまりうし経ふみく
え兄もらえでとあく御どうよ。お武　乳母など
よぬすそうしいげなふくえりすとまり
思ひしよとのよまりまひし月日の
うちまかしの我天ぬすそてやままよさし
にくしへ
いくし夕かの

まうりよりしに　細 小武り源氏へまうりしつとし花遅まくお武部なりしの往きへ八みのむかし
ともしハ御つきふる所へ師勝のまよ参をらく
まうつまぬ人　孟長吾の
境地と弓ると所よりえ
らぞくす京気こ
二 りしの秋のちうとく代
河右介御湖河のみかの道
まに二かわり秋に二かわり秋
みも逢ミ人二ならかの秋
細 今の御湖よまつで待
らぬハ何らうく逢べき
ぞしおり 師 初瀬より
ていのうどくいとりふんで
く恋つさ瀬けも
細 わりつらのきそわさる
そうを川られしる世よ
もるうれおやとと 師氏
寄いいすぐわのぬをられ
さとせみもあえらと之のなり

ともすくうんとぞ思ひしわれいぞぢや
あるなりぐんふかくかゝりしまきさ涙しまれどう
ちりうしひつ日ひとひむり指波ぬのんぞ
あどうしつまりつまふんへのあるゝ涙どもとこ
らうまうきるさむりゞまへうり川あさハ初
瀬川といふおりうりきにがしの追
みさまとの秋のさうどくを郡ぬゞどハふる川　布留河之
のべはなきとこまやぶれミさせまよりと
きこえも
昔のでを云これと為の草ハ付とうりて
とふ川を川やうれと思ふくぬとをそふの
逢瀬よ别れさんなぶれぬゞとうかさてか

御裳濯川　御裳濯みもそ神ハひろくめ御裳濯川の辺とかり　盃　右近よ立てむかしの事をさとき
あハ身もすがりしづかり濯よ神をおくらとらし　細　西勢の夜会にそのうこのうすハ忘
らるゝど今ろ逢ぬる事のうれしさハ神ろさもあまりうゑ
あみらびこらぐしう
細　きうちよ新そへうるあう
ごいを私あくれるなり
所ふうくうまのくまのしたが
とろあり
そく夏とそ　細　久兵衛よりハ
まうくりさ殿おもらし元
此趣後りハ案上を一
まそわたハ法よハむかうう
をやめさくまみうり　盃　文
息ハやそくらうけうそどらう
あみらへかうんしえろしく
つくしそんのをよく
細　元の給銀気ハ人のよく
其上まうち殿しんみて
名ふく　盃　あらくの新
どうそ銀業をもよそ宗
みとり
女房人ハ其びまうら
細　あらくの神ハ名ある
あり

すう殿ハとめやもろしてちハいとうくめ（たまんよむろうをそろへ）
ごくろうけをすゝねるすびよらく
ちう中を世おしうハいよおのさずるるもし
いぞあられハのぞしく嫁ひお経ろんと勢くろ（細　あくまろく）
つきまとくまぶそくぞんいて（をまうくすすへ　盃　乳母のそそのかし）
さくいとりのやうるは
出やよろくやそんしもどしとをやさまへ
ましうれハそさうくすてあらしもらし（むかうと）
げまうしめさまてうつくしをんよくて
るすまよそれらし人ハそうひうてうさ
うしるんらうれバ雲よのかりてゆきさし（太まうんのこ）

ちらハの中びしうく
不まよらりて又ちうもし
人さまくぬまん
細　文弥ぐよハうどまうち
其なりんとも出まざ
つましよ居く地めしく
ち絵よどうして地り
くあまあて
いづとそを　細　あまりある
とそもありおをさうび
よ銘をしへ春え　盃　寺
まうり下向の折のるし
ふでそら気ハ
晴ハ奈良と東よみさう
細ろうくのやとりの丸
余へまちろさとと

をどきうひらくし給状風音まうちろうよ（細　うけくりの跡のこ宿く）
めうさのかりていてもそこむきよ抱いと数
りらんどをこのへよろう川をひつけられて
人すらすまんしもあらずそうこしとく
出ひそちをつらとせんへのゆうりのつおでよ
中らの体あり殿きらく（内裏のうち　細　内大臣の御事なし）のすよともらき
すさこれよどおこれ抱めしすしそ給さと
そけバうあちさらさゝのりくそ忘しま（盃　あらく早中し）
まめるいつとそしもうさゝるよやどう〳〵ふよひ（あをのふし黒川ホ知らかしこし）
かまらしてかし又をひまどへしうんとき
とおやうしちひ〳〵ちをど気ハ六条流ちう
きまらんかうろれハ狩とをどうしそいひそ

あらどハ又殿ニ参り
細 伯州より還向の後せ
師 玄宗院へ帰り参らし
みちよりいりくうう
細 二条院ハ挟みおりし国
ありよ思と玄宗院の
臣下房く住まるとかく曉日

こうりまうそ右をめしお
息る 細 紫上よりあまく
右 りうがかーに右をと石お
あうハ御国とくし
井ろそゆらんしらく
細 紫 一の御方もて源の君
あふつのハ楯とおぼすらん
ハやうし源の相よう人に
さりせまうそしくハ公個
まそおりかへし 色目
師 [illegible]のハかが御方

まもろうざりぐさみね奇こうらしろふ[illegible]
いろ殿よまゐりぬこのうらとうをとめらくて[illegible]
つらくりやらそしいろぐ[illegible]うどひさ
いそしまりけらひらるよひらくらして[illegible]
でふかう車ゆかくまのよふかぞまうして[illegible]
とせばゆくころすらまの髪なかり。その
の日まんさしより参りかぶらうわら人と
教ハれまへみも参りてそ。ひかしくりかまう
とのあかまよらわくうそ右をめしいづれハだ
りぐてしくれゆゆゆうぐをゆらんじてさ
どうらしるハ久しくちりうまいるす[illegible]
やまめんのひきすへら御ぐくるやうらまあり

しそちをとゆらんじらく又源相ニ法とるのがくまゐりてよあつハ紫上の法寺之の
東がくる 源 網露のあやときわが身をぬしも又二度がうらどしまうん 万 細 阿
万野ふ千一君及とひゑり、南村流布仙覚が長亭若及しち古哉ニ度がくるく。わりかる
ん[illegible]死こまがくるハ年寄の立ゆりのあやとぞうく 師 わりくしく薪能ある
しやしのまふく
ゆうりく 七日
細 長谷る江三日参詣
清尾ちるぐうし
ゆうくこるよはすせ
細 叶御よりしみくらう紫上
う事ニ[illegible]ハあくるに

し。ゆりしきしるとありつへんなどま[illegible]
むつしうらふうれどしおどののみ[illegible]
くるみうよすぎらくりかれいどお
こどハ偽がくるん山ふうし偽りてのみれ
かる人へとあんらなりつけしらりしらのまん
ぞしとかひまへ御しいそん人もおうさう
よきうをなりしてどりわきヤうらん[illegible]
のらよこう給くハへてそこえてろうしや
せがこんなど。ひらされて今まつてさら
得らんとそ。人で参れバ中のしさしつ。動[illegible]

女君ハ卅七八　細　案八九
八ニテ異同　異説此
意源氏四季ニ見ル説
によりて紫上卅七
なるべし

ゆかしのみつしなる紀と
紫の事あるとおもの不
幸なりけれど前よりの
のそなはりしみける
なるべし
のこりとまれるよはひを
世にあらし　細　源の出家
ありなどさせまほし

なつかしくあはれにて。ことにげなるにびあはれ。
しますゝめりさ御ともいとゞいかなりしあはれ。
女君は卅七八よなりたまふ
よろづのとしよわりゆくをつゝすこし程
へてまたのこの程よりそあらはれくる。
見たてまつりしほどを思ひつゞけて。
くさぐさにこそおぼしつゝ。さいはひのよ
やすらかにてよそにさいはひのありとおもひし
つてそおぼしとけざりしをわすれがたき
しのぶるにそれをさりし事ならい。にめす。
わか身にいらへしてもこのいちかゝり給ひし
へありしをさなくてあるはいとおもひより

きれとのみへゞくてそのびてもいふべき
ふかくの初と
やまれしそのつひたてひとつまなれんとぞ
ひとりしんぶひさこそはれでこいかへり
かりもなりきゆるさまむかしのあへてこ。
源細　紫上とのことなし
うへも年へるかどもらぬいけすぎにさる
ひつらの後のへしや。うちすこしさやうなる
あやうしみをよりうらひてむくひ
後にいはぬやうつきかうしきけるへひ
まづはいまはやけよりつゝいそぎて紀
ためりし後みとあしぬは身めらく世中
のどやかにはなさしまりにて。なぜる
きみはそれぞ代のくまひはかりしく

さりやされるそのつひあらく
ひまらんとは　さりやはそ
れよりといふ源のあり
ひ別しらんと誰らし
とさらしさんとく
人ゝ年へやらどもら
紫上の年の御すこし
紫上の右近ともいはで
とし月ならさびひまで
とうらく
さうすし紀かと
細紫上の初源の御かの一向
まさかりしきとは思へ
ざりしく
いまはありやなよつゝへ
達者路次居にて此源あ
なりし　尋鉢　身よ泥よ
源の身の上の事とまで
有路次居ハ不識なる事
なれば法樓なるし

ことさら修行する心ひて 御前の大臣 山がつの…身つくりて衰み人どもいそくとも…うちとどうきての事に…

四のきんる 孟 古 安房守 …を付て… 師 夕… のよし… の上乃時の…

人の心をこそまりよくみるべくと
えぞききつれ侍る。このふぢのつゝぬら 細 源の句ふうふれし
ろんや。あはれ夜のんぞいとよきさ
やうさうしひてめそこそうとよひめ 修行
へじ。おれをくやしやふるすくさて絡り 細 右をうる句
し夕ぐれの露の袖ゆりどあんづるある 細 源の句
つけさんしくきて也。げに衰なりまさる
こられ。ゆふごろいいづくよりとのすんぞ 分とお姑男いゆくよふかうすなど
あるのすゆはらてよそてあやしみ
さ山ざとよるすんしべもいるんいうそ 右を衰
らぞこ侍らきれば、その世乃物語しあ侍
つらくしんへば(ぞ)くとぶ(む)まろりしるあだしゆのし

わかのうちなる絡りぬ也 細 紫上の句 孟 源の謡にまうとん
くるしうて。まへのほんあれにでごろう(に)
ねつさをるようるうくくもわるみぬ地を
とて。(御)縁しくながらんうきさは絡てつうき 細 源の
らふそうのむ(し)りの夕臭とをうつとや
あどのまへで、ぐのうすんいもいれ(し)もうろ 孟 右を言也 師 夕臭のと…
の絡ちんとおもいまうりしとこころよ
くそ功ひをうりてここえまいしりとかう
ゆれいあうしのしのやいされひりとろ功補
ゆこの衰とのまへはいでて(かう)うさまでなると
こさしゆればあうりがまきてあふへう(ね)
我みてそうしるやそう(し)もまり…

わかんたる絡りぬ 細 源の句しこん也もの…
のよう(ら)いおう絡まりしことんに 孟 源の…
…

なをとがむる能ハ世をもる源
の御心也
かくらうちつ
孟源の本をと人の心ら
ねやことよういのこそ
かうしひまのゝ了 細
のそげなをしも 孟
おる人なれて
いまうそ源がつらなるも
なるへうれしく世出家
がら月般へうきらぶを
もせるのハいてらひる
しもやくことまそ心出
へまうしせんのらく

ゆかしめくさてのまゝかくらくそめくくのち
細源
いめしなまうつざさうしべみの人ごのそうらう
源氏はまのまかてむろうし
まわくへなるん。こうしつ物のつゆそでごと
源
よらうかしうまゞつゝしつゝし段にひあ
おうのり葉そうしそうらきうゝかく
つゝま。いとられしくやりそでおがうく。いまよ
まうぐ物つゝあるさもうひるすさゝくらよ
あんち。中やゞよへるのまゝらそて思らん。いとし
内府のまこと
孟中将
わかきこりそさはうらめるにかとるすくしらく
いまゆかくましませけると
おろこのかまこと
いまのなちじめ。うらまりてさうらんかくすく
なるころそおもひ。我いさましくしきさ
よゆかしぬ所らうずよいうしてう
といふんしすさりのよものゝくさくし

かくさんひそいしつゝりそなさん
細太とそくれて
かどりくしひさへてる間くいてしられ
しくとひつさこれらうよらん中ぐさよ
内府へまて源
孟右手同とうくかりきて
よりおりますりぶらとく
きゝとなうゝる。これへつきん間也
孟夕顔ゆく
し給らんいふつくはなくかし給ひ
いうらゆはじきくとひつさきつ夢
おもしとく
さる給らんこしてそいつさうまゝ世給へ
細源同
めし世の出。いつゆをりうちかすうると
ゆく思とるがしらなるぞまでらわるゝ
孟夕と源の詞く
れはなられりけり給しるん。とはじひ
源同之
夕顔のまこと
いやうやうてつれなくそこくの中に
おもひれくらしがりたひらくしひ人

わりなくさなえてうた
ふひ 細 花散里未詳る
その鄰に所々ぞそ
生なかへて花ちよ思
人あらく
涕せらるゝ
細 六条院にて運とら
んとらく見むらく
涌出をつゞりしまゝ
見まつひ 細 見より
[illegible]
[illegible]
[illegible]

りのまゐやうと
細 青実の[illegible]
[illegible]

あはれしをいのちあらくてわがこゝろ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

あらむさま海をもなめ給ひて
ふらせ
細 源の今はよんどにて
うひまふやうどうに侍らせ
ひろく 孟 私が紙をたて
まうり給せまりつまかり
そん人ぞらあらひあらじ
え源氏よりおかりして花も
身ともうつしく

あさう志めとて仰くらて
所数うくね志もりは紅梅
と称らしよう利益
あらでは御覧ようくめぐ
つきあはひ御つまにいせうらてか
やこの殿ハいそしねのの
きれいつあはい迎あふ
へしうし
らくうま 細 それ安隠
よくかもよしまさらふ
ある也敷物の作くても
まドうしえ源ふ松
りをなぞり給ふらく

けしひすらんこそられかうめいうく
うちとしぬ人御はあくりらは、おもらうと
のりとも…
ん人こそよしけくぐうしげる故用しこ
れどあるべうら海をも迎ゆのも志らくも
んども、そのつしきそんへずらうらひき
ば坊じの志もとしるのうて治うん、た
やこのれ殿ハしえくやむね梅く志かを
うぞすのも侍しもといはでりれらんじつけ
きれいうくいつて
らもんとこふえしぶる、紅梅のはこ
仏神の名ひきうじやハえ
びさ侍らうかや、おしてられも
さつらよかつしまさなとしられける
じさじかり河花ともをめでうう

うそらすね 細 類ハうきは
勝の并しぐこハ滋流
也、猶紫よ佳志でき
あらしうハうたり
哉らさハ滋也 孟 仍とい
まり勝りくてハうそしね
ども、めて滋泥の中に
ごうしひてあわりんとし
あやうられぶりて
細 手紙ハあのつしいとく
まうらり、紫堂をみるとし
うれぞうりどるつらと
かるきど、手紙ハどれ
あらて孟うしやうふハ
あるきてしく

あせうる 細 顕證也
あらむやうく 河 異證
師いらしあくられか
あらしさん花
中宮の御らつしやもとて
細 中宮の介ろとハ后あつ人

いとこ…すくねあうひさうん梅をとしぶん
つらく故用いそうぞうのうこれいてうう
ぶしきとりいそくうしらむすう
うぞおすしぬうらりやみのよそらあれ
うさみしもうくねをいしあげんとのう
用のかがりでいろれうらてしうわうて
まれどめてくうらみくくらうおりしはね
源の…… おうりを仰せあひ今をそまうう迎
けく紫ちおようらずとまたくこれうら
紫堂上の御名
んむらよれきのゆうらゆはひろく
おうらのどとあどりよしいうく用ひて
くよすとみらうまんれハげもうりよ人去
ひとまちの所を
あぐとめうくしじ中宮の御らつしゆ

さ方はあれど常家は
人のつまは人の子
づきやせ 弄 中将はまつり
まつ人はまぎれんと
く 師 中将は里居のわ
のこ人さげれば書は
のどやかなり 孟 文殿（ふどの）
上のそれありを
仙院執政大臣家には
ゆらしきこと文書らうて
所く 花 文殿にそれあり
と姉へいりてむかふて
の家を候をあつめてくれ
かしわそりにさうらし
あひだにも 細 花散里を
相住もあるべし 遠

世ならわろき人のうへとや
弄 文良なるものゝすを
世ならわろきはいはれぬ
しらしとのぞてうらりよ

ゆらは。ゐ中のひとつもとさとなくのど
やうなれど。さてさうらふ人のつゝきや
さてあまた人と業して。すさうしれれ
どうしそしのすゝの名のこゝろふらのそて
わらとこしょうかりてしかわもおもひき
こも西びやうにさくの給はりこそ
れば。じらうしへてもあわすへと給はし
とやう人はし今ぞうへのこしむかしおよ
の物語こそいとまふけたくれるよう
給ひしわりなうとゞしくも申しまかう
すや。しまま人のうへとてやくとす
くらうはるしあししらうつそうよへつねに

人のくそしもわかりくと
しは 細 わろき男の上は
わろきすれども人のう
へをはいひあらはし 花 此
源氏の わろき人のう
へ源氏の業をやのまかせ
とのまうなくもらう
ても
のを思ふ中も 細 出
人に聴してみるに女の
為のむつかしひとつへ寄
ば縁ろく
そのつくるさる御わけ
細 源氏のことを云て
お以後世上の人の上をも
もろこし女のみを合点して
しては不可疑るとて玄
家よりわかりしたる源氏
は妙る事とてそぶりし
られてさとすよ女のことず
ともうはさ源氏の上を
ういのあつく
わすれてひくふとよ

こと人ばかりはおもひこえられたるとて
いと長じ身ありしあつ。ひらひらへまたし
とおもきにしよりとおもなわをと。女とし
いふものゝおおもはわきまへてこし
べからずすまくしむ人ば何ならでと
さんそひしをそのつしさる御できを
も。おほくさまよおもくなれてひさふ
なかならうまさかまさとわがひろくる
人そひわうかしけよわくまし。だいふ和風の
ちよ、他にする人のあすかよはおなじうさうさ
うまし人のあ面とうぐくゐすへわう
そうけくそうあうしらずすうろどは

細 わかくこの中に夕顔の上のやうなるハあるへしとて 師一向にかくしたまへるかはしくにき
かのまかりしはかりのほとに 細 此のミかへし花ちる里に夕顔にをまた今世に物しあるへく能
たつのよれはたれし御かたへハまへたる上の頂に見くへり。源氏の君もさこの方の上
人のありしを見しらかくこそあるへくよみたる(?)夕顔いふよりさきへく
まりしとをあらし
細 紫の上の頂に葉の上をも此
あるをハとしけるる
くはりおもひさかへり

みえつるをいしと
細 此御息所の母上なれと
源の後にも又そひまふ
いとつらくと思ひさ
まつく
なをふかきに月のあくたう
思葉依一段にてきさかりて秋
此紫君上源氏ありて
わかとこのりいまくにて
花にあわりてさし給衣

てあ巡りに望月ハ殊にも此過源氏の上より源の年
月にとらへさまやめけ 孟 九条より六条院ハ源氏せめ給ふへきさまの事
まさりまつし事

こゝもとらへ し 健けに
花一の事人ゐも来の年ハ
いつくしめれゝやしとも
やうめる事とやうし此也
花今葉今の世にも佐之
人あすしむ抑より商人ゐ
とわれるはころうへ給まる
かいしのもとのつくらん給そ
みなうもしろくいつひれ
かく候へし
その人の 細 此紫の護姫
とそれからく最ゆり孟説
のをまといのそらつし

とられたりしともわたそうそうら
うくもわりしられるいのまふらうと 夕顔の事
をわしのあとゝ中はくらすへ給うへ 葵の上の事
さくまうしとのまふあすとゝの君らくを 御息所
ハめくさましとかくまくら。姫君のいとう 御息所の事也
つらしけなくつゝまんりすくや給から
うきけさハちうこしとられりし頭が 孟 紫の上の事
しくさくのふハ九月のつもりなれ 葵の上の事
つゝあらめ給ふへこしすかくしくもい 細 早速にハ此比の事
りくゝうハわりんしうるるわりし 此紫の女房達をかえしかへ

あとりしめき渋いらしふくいゝらわりう
らあんくも京にらかのひそうるあ
どよふまりまつけくしびありわるをて
てふつくもりしも残にやうしひ移し 細 二六 此比は上達しのあ
ぶまられをとうりしてなれバ又人のまて
京を夜のかしらひろさうろうなれバい
らめあじやうの拠いとうくりこめつね
ていそのんのゆよるどくいしをさり 時茶之
ゐり右をそうきしの夕条にいりなびてわ
よしなりて人のへくさらくの さうぞく

十月　細一本十三ノ十二丁ト云

何もてなしし　孟月

表しとひし人の　細

孟　夕良のうしなど

さんとはおぼろげ

これより源の花散里へ

御渡し師花散里へ

あづけさせ給ふとそうくの

まかでし

うしとて　おり物語りて

しく御説　細

世よ　かやうにて

けさうの今年なりけり

廿二才後孟孫同孟十三才

のころは姫にかへし十三歳也

て女となし　細

なりゆきし花見同花姫世

細姫しは花姫と云也

老かうふし花散さる

三姫君の手し　みくらう

と細しるよおりよとて

中ねと　細夕霧中納言と家

ねて物語しけり。夕

とくの人なごきて十月よそこより給ひて

どうんげしのれりこよろこびてたまへまへ参

とそひし人のよれうししてたまうこ山

里よろしれみるるけれどおさなき人のあ

まくりごとしけり人へそれどもくる給り

しう犬えらくいそぐらん女よたりけむ

ろまけりとゆかしぬかしうちへさく

つけうりとてまじてまかしてかるく

しはなかうへてりくけるなり。中

ねと覚しつけさうよあらんやいおまへ

廿なりごしくうて月山の河めきて

ゆひのぐされば、ひるびしよし給り

くれつりい給ひとかりつり

夕霧夕霧方と花散里の

お分よせしいふにかへし

くいわしじとおこされ候ま

ぐしうこし

うらくしく　花散里

の所よ似合しくうち

ゆへさんもえすくてつき

つれうれいおろうろなす

いうかしさとく

らんずくくことよりくまし

とゆしこまやかよそくし給へげよろしつ

人のおりけをもありさくしぶりんよ

のなんのひとえるかの一すかなく

しともよろこうれしと物ひとうるよの給

ふ消物やかゆうし人いかゝあんありごき

まそうらしはなとうしろかやすく物まう

ひきあれてあなとの主ふうきくまう

ちろうふ人なども一し地しして

ぐよ給ちをせられしうへにさしまん

とのうへのくりの人いれむもえと

とあとてなよへとよ霧の出のあつるな

むつましきゆかりのあつ
かひ　細　むつましき
太政大臣東三条院
源の宮よ太政大臣の
いとゞ　して　みつ
むつまじひらさん
細　御ゆかりのつゞき
らしおそらく武のゆ
のゝ　ことに
御　つゝ　宮の
こと

この　細　源の宮
御　弄
ら　かの
作

むかし　細　源の宮
ゆかしさよ　ひら
かく　の　あまし

めとうけ　こと
細　の　む
し　けり
思ひ　の　人や　細
花　ゆかりて　つまさ
あそ　の　ゆかり
孟　源の　細　女上り
もく似　とよ　や
おぼ　よ　かて
とて　ゆ　ひとけ

らん。むつましき。みつりのおはりひるさく
なひらり。此東三条して。人のすぐさ
ひとあり。太政大臣おれば。おぼえむずしきらり。
このまりぞ。おやかるゝれとおもひりあるへ
あそのの夜やがゝしゆらしのことにそりの
つり。むつしひりかるゝしへてとひみるほなく
もとりはすれしと。年ごろのおねく
あさよざしも花ひらことさりけりと。ほ
のうち御はとれむくるよ。みん本帳のあそ
むびかりちらうるよことなりいとかに女あ
しくさへぞりがゆりや。とうく猶てこの
しも。太くとりいたるそではこのとぐらよい
あべきんへかくまこそとこらく
ひあそ。ひさしけるゆめしよつるこ右府
ひく。火こそいとけさりひさりんらを
まゆやのかへ席しきりのとしそさけ。
ことゆほさねうとそ。本帳もとつしそ
やり猶ともくおつしはればそこそ
かりすりやうじひあずいしかやすくゆれ
ばらりしくて。今をこし完ことんやおぼま
まらよくしものまへば。太とうけくもとて
しります。ゆりれの人やしすこしもくへ
ふげよとゆがゆり此まとのとつしげさ
ありいさくさとこと人もくぞそあらさ

とおもひあはせらるゝ 師云
ろかうとみえけるよしく
みせ源の心へく
いまさらに 孟他人のやう
みな源の心まゝしまきを
まなり

みやこのさきの 源の御心
細人の上の事にかくしは久
し 源よりはすいおく
しとし

今はものゝあはれしく
孟源の御心それ程に
物語しまへさの年
の程あてはするとの也

みこのかみさんじこゝろじくゆやめかすて
細源の御心
年ごろもみせまゐらでゝよくけぬひまよ
すくろげさ侍るぞうゝでとなりよつけて
さ人のらうしてゐ、ためしこそのこころよ
人のこのてゝし
とりゑへしのびてさとよこゝすんさここそ
孝源し
られざりくらそはめとしのびひ給ひは
源の心よゝ云賞人の思てこと
こともうすしうかゞひそくるはしのは
源氏のこ
どうそへまでおやさとのあまりのうくとしさ
前世の契こ
なまさひあらしりの代らざりつらく
をありろうれ今はものゝあはれしく
かうひまべき佐わどみもあくうらじゆ
しんの佐物語とならまらくて細

あつらしん 細 三四条の
侍りつあまよくさりける
也 紙何合せらゝをとめてし
三とせよめぬの前乃
同そてのまゝし 源とて
いらはりの義ともゆらぶ
らんみとせよみすりねあ
しうくもして 蛙子の
父母よ捨られりすを玉
ろうのわらめのしよよ
きてゐる紀
らうはまへうまならあれと
と 師おろうし見うて
ちをうつそとのまへるよ
つあそでなきあけりそいろ
かいりよあられとある
とらけてのまへうく
前世る おまてのさうをは
あきたとよ侍りう
うへこ

よろのこの御がつらくてくらうくよ 孟花鳥 細
きちへんこともうけいかうれば 孟
言し
うれさりしそめゆるけりのらをよ 細 河
れさうらし
じとおうりるすさうりよすへと源のうよ
くうう給ことらで若人よいらくのうめ
源にくたうるよ似るとし
をくはうびらうら、何とゑ見て、さ川そ
源のこ 細 源の御心
まつらろとおれしとも今は人よれいん
細けりへこと一段をまてし
とく、わらん、いるゆのすくいあは
らへとゆかもそ、ためとよおうへさうしの
源のこころて おのこ
給ひそて、そらりのね、めやらくりの
まふとうけしく、まへてかへよもうさ
源の御こ孟 細 紫上みも给うあき
かはなうして給さう山が川のなりよかへさ

無アゝのまねとの　源氏
の古 無アゝにまる所
のうらとハ家のうらし
すき物とも
の姫色とよわりの　玄達子
とまは源のれうりとがい
実くしくのとをそ
なまとこられと源の主
やうらやうの女なしとみ
こゝろへしやうの人おら
ハ為人くの心地なりそ
てしよのまみし
らさあひ　花らさハ猪く
ましれのとものゝつとを
猪よおさんと云ゐて
こらおうね人の　五古表
紙と師らとめのやうよ
真図よハありしそめて
異本よハ実図をつくれり

まばゆくいとはしげなるもんとおもひつ
つましとさくりてものうくつくしさのまらく
みんなかうの地わりといふくもゆまゑ
らうそぞ無アゝのえぬなどのとのやすずれ
のらひこのましう志のふるさうす
しげれげすゝ物どものけしきかそしきてら
てのまこのまうりよき世れもうくみ
りのくるさゑのなまき従ありけくらう
りてすてゝれずなにしらおくもぬ人
のそしきとあらめんとのまへばおやし
の人乃世やくまげ人の心をもげまらん
と我世かりそよをしうんぼとのしまむ

十あるいりくうとはくハノ
こしるりうらとほくハノ
御うしよろとをして
細紫上ともつかくかり
てしとさうくんの心とも
みぬうつてさ物と古物
よき宝めいとさそて後悔
おくもてし　細男にハ源氏
え心まうら
の男也夕点上と思れを
無もうろう男へ地なしたら
男なりうりおうちもち
とハ勤ひうくハ我の親よ
我まりしさき志のあらへ
こまあり　弄男ハそれる
れとくハ源氏の我ゐまさ
いわうらとらどとハまそ
との所なるすうぬこしく
実ハ父は志をあうらん
のやまくうひとし何おう
つらおぬ第こもうらと為
とハ第のもうらくれてこく
てし　縄女々ニ行ウ　後撰百
葉ようありうて　登るを

源氏の夕顔　俤の名もののりそすゐんの姫君を思ひて心より
源酒　まくらよきことをしてそいまの心ならうま
しうざなうるようすそなりてこのへうら
五夕顔をかりとも紅梅しとぞ
きれいにしむもんよもれしてしわざぞ
しとそうてもひおふよ地りてしあつこそ
紫の上負し
地をすうとわくかうしけむすず
細源氏
まりまそのひくなまなるひるよ
源氏
まゐけるうり男いそれるれどふぞうくいの
夕顔の夕お紫の上の変話也
やらすぢどおもくらへ我とやうてひとう
紫らし
ごうまへじげよのすく紫のうちへの右
五夕顔のうしし
ねるあのとそこまか世ねの君ゐもうし
ふるうへ
かんへきこぎる出まうさとうういしてむろ
見付られたし

褒美してもらへし　後にいくとそへるまうでんおろかる歌は若の紙をうちまくま
哭夕顔のうへとの事 孟同 仍拾遺 今の旅人表紙年の事とく
けるやう〳〵　細 源氏の御ふく并さるよし 紫上の如りひかけし
人数なり　又　細 夕顔
の五人へ　かの御人まゐり
ての御事 孟 兄弟の事
ましけるしさうのらく

さはりしてき
細 夕顔ハ玄蕃の兄弟
とそひまかい 孟 夕顔
ハまうとの御ことしかゝ
まふとかたまつるへハた
うしく思ふつし
かのかきりつくし
我行くしそのすせ
細 兄弟後分のそてなき
め給つらしてむかしと
わかめかりしなりしを

今は信ねとそへ仕たれ
さもかくぬるすべくう
そよくましけつまと
今そ三条も　細 あるよ
大弐の少弐なすし 南家
受領の少弐ふとも谷寺に
て詣しまし
ありてむかしのいさしけ
ふらい　細 大弐道ますく
兄 細兄弟に いきさし 河 兼ハ
とかまうしるき　河とら
ふかいきしてうらけ
ぶかうしけるとも
細 大弐なる 孟 ……の家
国うる給ふ国の守の事
ことゝをところふかり綵
黒あるんとに　刺しく
宝くら詣くとり　後分
にまちの家司なりき

いそうらてかくも
細 後分ふとなうらそめ
孟 もい后中へ入出入まふる

びやうぶへとのまひきれば　ころさよまかう
源氏の
じあひく、へうでゐしんともいうりの
夕の玄蕃の兄弟　兄弟の殿上
さうぬしまうめしすぐくらん　侍兄
一めせとく
さはまうりの将どかとまうつく
孟の玄蕃佐ハ佐渡の所もし
まうざりきうしくいとまめくさつ
ところまへべうとりへてきまくらん
ものおいへさかのかぎり川らしさうりし
孟ものゝ元のさて
はすまゐたりしかとおとまうるる
うひさうしもことしへすくそむひへつく
べうしや。はちれしひけたゞめいはぬ

しらけらくてゆやかしたしくめ
細 源夕顔あどくし
びさうらさまわ限りなう嬉しうらうちゞ
めぞもあやよ拾ゆゝよ。今ぞ三条も
大弐どあはれつりしくさひれる。ましく
げんかいさごけりひさるひおからゆへし
手かし 気調 登山寺
さうと覚るしかこの給ひのんぞへ
ぞかうきりのよもしもれたくまよ
おとらしきの実
せいふかうそうるあそこともとこらね
べしとそこるのまつしりもまさめまへ
きことえどさせしさせのまふ。ぶんごのすけ
源のく　細 豊後介に家司まかうく
かりぬとしびめるあふべうこしてし
つしまそのみとも
ちよとうにかぬまさくいもそへあかり

きこえとて家司に御て
ふあり、おへしてはつる人
とをいとふかくて孟豊
探合、春のわかりて是云
どうかん束忠貞かくく
西鄙聖を案まいらせ
まうこへて西月とかど
ぐしもち御へし

てうじくるも　細　網を
おこしてすゝみてあそびて
いとまりしたくこゝみて
まりも花てこそてまり
あそしおかうらうらも
しいゆうの様術こそ七絃
とする捐衣中みとの方よ
いれわ中ひそやかし

もたちかへるべきにしもすがすくおほえし。
源氏の心なるべし
おほやけのかしこまりとあさく夕におほ入ゝかし。
人をとこそへいとこまかにおもしろくいひへ。
いとしきめいかくしとおひんりおんとくの　源氏し
きてのけんをいきそのゝ御たりまあるやうか
うとしおとゝしまみすゝしとてとうてげるし。
年のくれはれいしつらひのことんでしさ　むつきの
うさくみずじやんごとろゝきはつゝに時め　紫の上花散里などに
にそさしてうちうち九おなかびとそ　やよひのついたち
こしやし山がはのきしにあれつそ
そうらうて、ますて、てうゝゝゝわかうそ
まう時かはそでによかりのぶかと　せん

とりのぶもれ
孟嘗が絹ぐゞりとて
云ふしんへこの契東まで
どもあきおわりけし　細　世
らいくよ
中將ふ卿　ちきこう
みなさきおひとつ六
されんとく一ちう
やこうすてそしおりも
も同らく飛すね八俗
を人のいうやあしき
とやうすうきやうよ
しく

ちよるきこゝあひ
細紫上なやうの方へさ
らひしあへ守こし
こちこのもり
細梅月よ今へそら梅を
若へみうらわりかふ
のものどをうふをそう
河抄衣東うう所くぐら
放すう康あどしとそ

まゝもくしでてと頭しいとかうき
りてまいまう給そゝのからうちきこえ　源心
気てさ御ぐたちとからんずるよいと　源のこと　源氏
世日うけりのどもぬれぐくよう
らみなくこそりのすゞうちかれとぶう
へまこてしまへいとらしけのまつうゝ
ま川ますもてすさまをうせまつるも。　紫の御方まても
されどうでさせまする。うちすゝもるゝ　世九月
いてもうれてぶよろこいろあひがひ
と源つけ久へおりがくしともひとのへ給。　源へ
そうしこのうちどのよりまいり物光。
はらんじらくべく。こえこおいてきるとも御ぐ

あり。男女の哀衷う
ちのり本紳く旅引
うりさじハ男呂哉し
さ路つん人の 細 人を
の中所をとちる初んる
ようしのさまりし
さうろ地の人のさ毎よ
乃ぬハ
紅合ぬ抽をとさうろへ
うろみさ抱ろれハ涼乃
紺ある人うさ行るよ
抽おりめしもう人と芸へ
のとちうし
つまきすくて おもろぬ良
どして みそ人のさ麻志
らんまあちと涼の乃あすえ
まそいつれとり 細 極ハ
葉見ハいろ里とささまふ
いさそしく ばきよのたさ

とえしき路へくれさひ
りまつれさをあて地 るひさうよらふ
たきあらひてられハられハとよりぐりつ
いろうん もうさきひそ いづれをとうま
さうけぢめもそしぬ抽どもるりをさき路
つん人のれうらよさぞ さき人つさまれ
まうしうさうろ地の人乃さ麻れふぬハひ
ぢくきてもあうりしとの路へバ抽とぞ
うらまうひてつまるすくて人のさうら
とちうんのれんあありさ。さそしいつ
まどとろ抽りきて さき てあへハそれも
じそうしそハいりうしとさすぢる

めのくしせ
それもうくさあらくハ
見も涼よハうひきくとく
うくるへの花 るびそめハ
抽りそすつくうし花里之
いまやうのめよハ紅梅の
こさりくさよ行うきえ
紅梅のりんうさうろハ
さるのうぬのこしある
うりさいまやうくるへら
へしぬ 紅梅ハきぬハま
やうさハうきさぬのま
く皆め底紅ゆへし
梅のおそこうぐるよ 細 涼之
ハ抽まそ白くハづくへある
うろのりハ紅し 花さうて
ハ抽まして志ろくうる志び
きりくがりハうぬき
紅のあやのそうきて
つやくうるうハうろうさ
らさし
あさ花田のうつよのかう抽
細大底よみら見へし
花海槌ハ大波よこうや

細
若男も葉あさしそえうつりみさくハおりうてきるうん
ひきくとく花るの衣つさくり黒之ゝり
らひさく抽くみすうらうじうるへのいとりんうき
るうえび涼の片うろうさいまやうく衣
るれなくさえ
のいとをうくれさうとハうの片れうさうく
らの涼をおりよつやくううらうねりうと
るきへてハ雅衣のれしすうりあさこも
ざのうハよのとうりのとうろき麻る海めさ
されども白ひやうとすうぬよいとこさら
ねりぐしてあ川の片うきよらうりたく
わうこまやまふきの花乃限それたまうハ
彼西の衾よなまれまき人ハこうぬやり

因みなどのりんをかけたるに。おもき花四あれぞまうひやうすしねたらりごとあかめりて
紅のはなつけてみ給ふにゑにかきても見まうきさましたりわか御かけの

紅梅かうりといふ 細 きそんハきさき 細こゝろ
内のやうし
の内大臣よりく
くち紅のもし心もち 此句紫
の上にハ色好ミと定まなくすゑつむ
らぬかしよ源のえをよせ給
ふことえてこそり
すゑつむはな 紫 源の紫の
心をもこのつてうや給
かつみ紫のうへにあり
まとは紅ならぬ心もちて給
連はやうそ源のままつら
かたんふめるまつゑゆ給ふと
へもわかきしもつき
ぬなとつりつゝし 細 紫
うちのもとをへハ
あの人の心をとこし給
けんの心かれど源氏の
ことハ只さか詞く 異源氏
紫の上への様さとまかりん
と思ひわたしんとしその

〔細〕きやうたいにうつれるかいときよらなるを
みつからこのあかはなをかきつけにほはして 内大臣ノ
見給ふにかくよきかほたにさてましれらんは ゆかしく
めくるしかるへかりけり姫君みていみしく 紅なる
わらひ給ふまろかかくかたはになりなん時 源氏紫なと
いかならんとの給へはうたてこそあらめとて 源句
さもやしみつかんとあやうく思ひ給へり
そらのこひをしてさらにこそしろまね
用なきすさひわさなりや内に
いかにの給はんとすらんといと 細 此句うへハ座あらし心ハ無源座也 書面
まめやかにの給ふをいといとをしと 細 此句らう尺あり
思してよりてのこひ給へは
平中かやうに色とりそへ給ふな

まふ何し色うし一段ありしけさまふ行く 用将の心ね様様将様此衣古若を好て人のしるし枕前集へ
るかしの事なり
こしてもとのく心ハ源おゆ 細 むかしへのそ苦様よみてうらし案とのうかふと
世のしくてしらくのうるふて
まつむ元の内まつれ 花柳ハ年すて申くうしいわそしく又ハ花をかしいふて 異 くさきし 細おもへ
梅のありはなさふきよさらず
ねめつるきは隠りまつく
ひらくめつつえるきて
かうさまにさかつやくら
かり 細 ここまて紫又 河海ハ
源く 元 色うさら紅ん
の織物よこまさらさを
まちろくに元紫のか
ちゝらハ定まありても
うしきくぎれをもつき
よるまされぞ花さく
いくさし河海よ紅梅
のうてとそねとなるを
おやまわらうく見し給
あやとひのとり梅
花まさてハ尾のさうる色
らちあし源のさねも尾
是のくあちつうへきよ
つまてしくの紅の目をまし

あかきはあへなんとたはふれ給ふさま
いとをかしきいもせとみえ給へり 香
ひのいとうらゝかなるにいつしかと かすみわたれる
こすゑともの心もとなきなかにも
梅はけしきはみほゝゑみわたれる 蝶
とりわきてみゆはしかくしのもとの 紫の心也
紅梅いとゝくさく花にていろつきにけり
くれなゐの花そあやなくうとまるゝ 異 源の作物く
梅のたちえはなつかしけれと 細 皆元日の作物く
いてやとあいなくうちうめかれ給ふ かゝる
人々のすゑ／＼いかなりけん 又

四十六

まよどうつし長うろ又ゆかりしいろハ紅のさもさくなり。当家の人ハもくきくのふちよ用ゆ
例の江海よ黄なりゆかりしいろとのせられたり。なのしも黄からうへうしとさぐ
ゆかりしいろハうまそ紅とうるうくへきくし
ゆかりしいろ　細蒔紅又上古ハ花も用ひ朽葉よりくされるる紫長可然
あらよふ花づいまう
盃紋気付く花どよく
とさまうるとまて紋合
さらなうとおわりあるん
うあし御葉よ候うり
なかけり
今まとうしましくまうれ
按云朱搗ハ六条院の冬を
といろひて二条院よ
来れらハ此録なりとも
冬か襲よあるべきなり
みうりよさきおほくみ色を
も志あらそとぬをすて
めそようべきてて
此喚のうらうきて
細彼の縁く花　袖口の
もそく盃しうらしいよろ
ひさりとえかきゑのき
ぬをかさとどうかれも
しいろり

そとしらうしめぐらし給げよにげ何かさ
ぶどうもらんの出ならうかられ出る人
まどもさぐなしんばつひのろうて　録
うぐかうよ末摘花の院よ御えそれ
いりまらうしさいうするれえんなうづき
どうりくよのし給へまておろべきと
とかさべ給ひぞやまぶきのもうさ
の袖ぐちいかくすけうるとき何かよ
てうわけまつりけれみふはづとりう
どしきらうのもよぐさかもとしさへ

いそやしきまいらん
細又の御く男様浅の比数
よ入て衣をまうる八幡
つきが出くらしけ比と
又は人へしの様なる人
ところされハ紅浅のとひ
色か花が紅そて此衣を
くへしやりて人らく々
もとしもさぐよハ人へさ
根の瀬をそへてわらし
てくえんとくうらみ
くへしやりて今まで衣の
えんし
内かしきわしなれハ
細此縁ありとヒ真る
生衣浅の御氣色なも
あいかれど御衣ゑけも
くびちらかあうし
女やくよわりなり
盃浅のらく紅此縁を
どの余りのまされる所
くうこけまさしろより
とさうしらうとまく所さ
へしらまといさうしける

あつきがさだらくろよりそやしきん紫
たみちくよてきて
ささてられバうしろうれなりくし衣え
しやつそん袖とねうしておでのすびて
とるよみふもうりはくいうて潤く色を
あてとらよもけとさ給つるは。つへなかう
どうすんとうろどこをさまつりけれつらひ
よろげうる袖といとよびしくうさはう
いつしと給けるくれ氣色あしゝれどもるべ
アまうでねいうしくとの人はくめさ
さらひうりやうよわりなうふりめり
しうらさりくいうささ京のつとさそ申る。

かるゝのらくまうむ
の古注からいつらひを

[illegible]

かりの形様髄脳ハ公任

卿の撰じ

[illegible]

髄脳[illegible]

[illegible]

源氏[illegible]

髄脳[illegible]人ハ[illegible]

[illegible]

の衣をたちへてもやまぢことくらや　しぞ

わかれ

やかくておまうりの袂に
かなべしと墨の上のさ
かしらしまふとも
あらさけすてぬ
細かく墨上の絵に流
筆こへなり

うたさんと　細　えしやんそんにおかをどられハ夜の衣にとうあしくにあかり頓勝なり
僧の袈裟の向ふすもおさんにハしらかりとし　花　古今云るに　いとせめてこひしき時は
うは玉の夜の衣を返してぞきるとあれバ夢路のあはれ夜がれのみなるをおもひてく
むさぶらくへとあて墨よごりよみまくわしくて衣を月へさんとハのあふよるそおもひわびて
君の衣のさけあさりよそしられ物思ひがちなることのあつまそおもひと女に通花をつかふ
あしますあまつしなてさぞうくにはかきさみをとりようくらと付えかんさくのく
所ほりハ八をかなんと昔へハ袈裟中をつつさとん　地蔵菩薩の名をとるへし衣の紋を
うかくへしてさて濃衣れバえろうといふるはかうさ　ざめて　まつひ花を紋を墨すも一
かしさは衣を久しきりんとおもひやらとく